

积
文



〔表紙〕 天保二辛卯年

式冊之内

兩村騒動一件之目次 乾

五月上統

各務郡嶋崎村

一御地頭所徳山主計様御当代は、文政 年虎ノ御門内村瀬平
四郎様御次男御養子にて不被為成御勝手向折柄、御本家徳山
五兵衛様御勝手向キ同様ニ付、渡り侍佐々木惣左衛門一名近藤
六藏と言
と申者新規御召抱、御知行所御陣屋更木村え文政九戌年より
初テ佐々木惣左衛門罷越、御知行所七ヶ村之内え高掛御用
金并御見立御用金身元不相応ニ申付、又ハ村之立テ林、或ハ
銘々控田地之地先空地等ニ生立候木品為伐払、代金を引揚、
村々再検地申渡、田畑は勿論居屋敷野方等迄繩張を致し、前々
より相用候反別より反別打出シ候分は增高申付、見取場或ハ
小物成等之場所は本ノ高入ニ申付、無慈悲非道之役人にて是
迄御陣屋在勤之役人松原武左衛門との親子為御模通、前野村
より横山茂左衛門殿、近年御召出之役人等有之候ても、佐々
木之勢ひニ恐レ、非判申人無之、村々上下之百姓は御用金調

役人河合氏え参リ、此度之御用向如何躰ニ候共、是迄逆も万
端責殿え御任セ御取計ニ付、此度逆も何れなりとも思召を以、
可然御取計可被下置由、尤先年大野弥市右衛門、其後大羽良
右衛門、猶亦近年永井半兵衛此人は山縣郡藤原村百姓にて同人は永井左内
兵衛五年御召出
しニ相成ル等新規御抱、当時御備等之御役人は村々住々之
為ニも相成不申依之右町田氏・佐々木氏杯御支配御断、是迄
之姿ニ貴殿之御取計被下置度、尤願書を以申上候ニ付、河合
氏御陣屋へ参り、右之趣相願被呉候え共、此度之儀は御下知
書有之ニ付、我儘之断り願相立不申ニ付、地役人河合氏より
右之段被申聞、尤大樹寺え村役人組頭井夫々之もの出会相談、
右ニ付古市場村清助御料所年
寄役アテ相招キ、及内談、願書相認メ、且
亦町田氏と申は村瀬様御役人故、武儀郡倉知村へも種々内談、
旁委細承り合セニ、野口村庄屋金左衛門一名熊田村庄屋源兵衛
善平兩人夜通しニ参り、帰村之上段々相談、何レニも当時御備新
規御抱之御役人等之御支配御免相願可申管三ヶ村一決、則願
書相認メ候処、翌廿五日朝日の出過ニ相成ル

○廿五日、河合氏前日之願書持参、更木御陣屋え出張被致、被
申上候え共、佐々木・町田之兩人昨日之振合ニ中々開濟無之、
帰宅之上被申聞候は此度之一件自分より差配ケ間敷儀相成不
申、何レ共村役人存寄次第ニ取計可申、尤佐々木・町田両公

達工入ニも相尽キ、住居家財并四壁之生立迄売払、御用金ニ
調達、御知行一統困窮難波難尽筆紙、近郷隣村御料私領之村々
氣之毒至極ニ被存候え共、他領之事故、致方も無之、難波空
見聞而已笑止之日を送ル、扱御本家御知行所村々之内ニも
佐々木氏え追從ツツレテ輕薄を以取り入り、我身を逃レント詔ツツひ候族
も有之、一旦は危難を逃レ候人も有之候え共、終ニは、外一
同難波之坑ニ陥入り佐々木ニ被レ欺くらま、外よりハ偏執ニ思ハレ
疎そまれ候丈ケ之損ンとも言ふヘシ、扱御分家御知行三ヶ村も、
佐々木氏杯御備等ニ被仰付、同人支配ニ相成候ハは、如何可
有之と互ニ心配罷有候処、不案ニ違、村瀬様御家来町田喜
兵衛殿と申江戸役人え当時御備、御分家御知行三ヶ村支配被
仰出、町田氏は表向きばかりにて、内実は佐々木氏え御下知
書御渡被置候哉と、推察ニ不違、丑二月廿四日町田喜兵衛殿
より三ヶ村村役人召出之差紙至來、依之同日より大樹寺え、
三ヶ村村役人は勿論其外小前重立候もの出會、終ニ騒動之
始ニて、困窮難波之基と言ふべし

文政十二己丑年二月廿四日、村瀬様御役人当時御備町田喜兵
衛殿、御地頭所新規御抱佐々木惣左衛門殿、右兩人より差紙
を以テ就 御用之儀有之、三ヶ村村役人九人もの不殘召連、
地役人野口村河合伴七とのニ早々可罷出旨被申渡、三ヶ村村

三ヶ村え出役有之様取計不申候ては、自分之役前不相濟、乍
氣之毒其段書状可申遣旨被申聞、依て三ヶ村相談区々なり、
右は嶋崎村ニて五右衛門・林内・野口村ニて甚六三人河合氏
之宅へ参ル

附り序文ニ認メ候通り町田喜兵衛と申人は随分淳之人柄ニ
候え共、同人を表向き先ン達ツニ致し、取計向キ万端内実
之計策は佐々木尻善なり、尤佐々木惣左衛門、御本家御知
行所村々庄屋年寄ハ勿論其外小前末々之ものニ至迄、銘々
白砂州え呼出、多分之御用金、或は地先伐払、或は再検地等
種々申渡之節も、承知之者ハ格別、不依何事聊及違背ニ候
者ハ、老若児女之無差別打擲致、或は手鎖、或は牢舎、強
氣非道之役人ニて、大嶋村・更木村其外村々之内右之例多
分有之、御知行所一統此方三ヶ村逆も、是ニ恐れさらんも
のあらむ哉

乍恐書附ヲ以奉願上候

一此度就 御用、町田喜兵衛様より私共三ヶ村、今廿五日五ツ
時村役人共不殘罷出候様、河合伴七郎様え向ケ御召出被 仰
渡、承知奉畏候え共、私共三ヶ村之儀は 御先代様え御願申
上、是迄新規御召抱或は当時御備之御役人様より被 仰付候

儀は村々小前之もの治り兼、村役人とも迷惑奉忍入候。付、是迄も無摺、御用向御断奉申上候、既去々亥年佐々木惣左衛門様を以、御下知被、仰付、再々応御召出御座候之共、御免御願申上、御聞濟。相成候程之儀。御座候之儀は、此度迎も奉忍入候之共、御召出御免被、仰付被下置候様、幾重も奉願上候、以上

嶋崎村庄屋
儀助
年寄
氏藏
百姓代
佐助
熊田村庄屋
源兵衛
年寄
半六
百姓代
武藏
野口村庄屋
善平
同野
清右衛門
年寄
次吉
百姓代
萬右衛門

文政十二年十二月廿四日

河合伴七殿

古市場村清助相認メ、翌廿五日差上候処、再々応加筆并拔文言等有、漸々前書願之通りニテ、願書相納リ候之共、聞濟は

シ御請可申答、野口・嶋崎は御利解御尤ニ候之共、御請は調ひ不申、兩村ト熊田と間々柄之始りとなりけり
又兩村より此度御用之一条、何事ニ御座候哉、御内々為御聞被下度段、横山氏ニ申入候之儀は、先ツは西筋村々同様と可存旨、極内ニテ被申聞候。付、猶以御請相成不申段、兩村相談一決、又今日横山・河合兩公、嶋崎村庄屋儀助方向ケ御出之処、同人出抜ケ候て在宅不致、夫より大樹寺へ被參候ても尅人も不居合、又野口村庄屋金左衛門方へ相見へ候処、同人も出ぬけ候て女ばかり、夫より定使勝藏を呼寄、二ヶ村村役人相尋漸々ニ呼寄、其上前頭之始末之事なり、右は全ク横山氏深切之思召より段々利解も有之、横山氏当地出役之姿ニテ、今夕は前野村宅へ引取、又明朝出張可致間、兩村能々相談取極メ、猶明朝否可申聞旨申付、夜ニ入歸宅、熊田村年寄磯七前野村へ送ル

夫より兩村之者熊田村庄屋源兵衛宅へ參リ、同村も村役人は勿論、井小前夫々之もの出会有之、兩村より、嶋崎・儀助・氏藏・五善平・其六、等也、扱是迄何事ニよらず万端一同ニ取計来リ候処、只今より相分り候も無本意、今一応内談之上御一同可申哉之段、示談ニおよひ候処、熊田より申聞候は、此度御請不申候ハは出府は必定と被存、左候ハ、三ヶ村之内より夫々出府致

無之、騒動之初メとなりぬ

○廿六日、猶昨日之趣河合氏へ相敷候処、同人又更木御陣屋へ參リ、佐々木氏へ其段相願被吳候処、佐々木被申聞候は、御用向は不承、何分ニも当時御羅新規御召抱え支配御免之一条而已、推て相願候不埒之段申聞、河合氏をしたゝかに阿りつけ、横山茂左衛門へ差添申付、河合氏一同大樹寺へ出役、何事によらず此度御用向御請可致哉、又違背候哉、相答可申旨、推て御尋ニ付、町田氏計之御支配ニ候ハ、御受も可仕哉之段、内々ニテ横山氏へ申入候之儀は、自分共より左様之儀此度は決て取計相成不申趣、此上は御請致スとなりとも、又は不致となりとも、兩用之内すっぱり可申聞、猶亦此度可被仰付御用之趣承知も不致、是非相断候段、不得其意、一ト先御用向きも承り候上ニテ、御歎訴等仕候共、只何事も不弁、相断候段、村役人不行届趣、横山氏利解有之候処、御利解御尤ニ付、熊田村は御請可仕と申、嶋崎・野口兩村は御尤之御利解恐入候之共、表向御陣屋へ御呼出ノ節、少シニても違背之筋ニ候ハは、如例手荒之打擲・入牢等被申付候は、目前と被存、其難儀を不得忍、無是非御請可申様ニ相成候ハは、御本家御知行所村々同様は勿論と被存、及其期後悔無全、依之只御役人を断り候而已相願居候方可然、熊田村は横山氏之利解ニ伏

し、諸入用も多分相掛り可申、其費候金子を以御用承り候ハ、和穆和ニ相治り可申、村方ニは江戸ニテ捨候金子ハ無之杯と、小前之内ニも抽テ申候へ共、何ノ之思慮もなく無差別ニ申聞候ものも有之候。付、無是非破談ニ相成リ、暫ク間々柄と隔り候

○廿七日、横山氏・河合氏大樹寺へ出張、三ヶ村も一同打寄、弥々昨日之通り再応札シ有之候処、熊田村ハ御請可申、則請書差上、野口・嶋崎兩村は是非御免之願書、嶋崎儀兵衛・野口新五郎再々応認メ直し、一昨日之願書差上、横山・河合右式通持參、更木御陣屋へ被引取候

扱正八ツ時頃町田喜兵衛・横山茂左衛門・松原武八郎・更木村庄屋紋兵衛、小者三人、其外桐野村・更木村・大嶋村下役三人召連、十手捕縄手鎖等多分取持、敵敷出立、大樹寺へ出役、佐々木惣左衛門は御本家御知行村々庄屋不残其外夫々之もの大勢召連、大嶋村庄屋周藏方迄出張り差控へ、三ヶ村之様子ニ寄り直様乗込ニ可申勢ニテ、三ヶ村之様子相待被居候由

扱今日之出役旅宿、熊田村へ被申付候之共、隣村儀理合も不宣、御旅宿御断被申、依て大樹寺へ出役有之候由
熊田村は今朝御請書差上候。付、佐々木氏を始メ其外町田・

横山・松原等至極御機嫌、（おぼやかし）罷敷、村役人共も不残大樹寺へ詰合、饜心不少、水夫其外人足等迄熊田村より勝手方格別美シ尽し取賄ひ有之趣候

扱野口・嶋崎村役人共再々召出シ候え共、誰あつて老人も出るものなし、依て出役之人々兩村村役人之居宅へ押入、召捕可申勢ヒゆへ、清右衛門方居合候兩村村役人、又野口甚六方寄合居候兩村小前清右衛門始メ逃出シ候付、小前素より上下一同所々逃散リ候処、差当り落着所も無之、模寄付先ツ古市場清助方へ一同寄合候え共、余り多人故相談も一決不致、依之同村喜右衛門方喜内方へも分かり、村役人重立候者五六輩、清助方残り種々内談之趣、今一応御用之趣御尋可申方可然と、清右衛門老人大樹寺へ参り、河合氏へ対談、御用之趣は何事候哉、猶亦兩村之もの只今罷出候ハ如何之様子御座可有哉、極御内々にて委細訳合承り度由、相頼ミ候処、此度之一条付内々と申儀、決て相成不申旨被申聞、清右衛門は河合氏と素より内縁も有之候ゆへ推て相尋候は、至極御尤候え共、先何事にて可有御座、罷出候ハ如何之振合候哉、相尋候えは、（河合氏両手を組んで見せて）先ツ是と思へといふやいな、清右衛門暇乞もなく逃帰リ、清助方にて右之咄し致シ、内談之趣、弥々逃散リ可然存念付一ト先家出可致と、

方ニ忍び隠レ居候哉、見出可申と被申付候敷、なんの用もなき所へふら〜と灯籠をともし、四五人之ものふらつき歩行、清助方杯へも、右之仁等用有そふに度々窺ひ候ゆへ、同人方モ忍ぶに忍ひかたし、心体不成穩、又夜中清助方を思ひ〜に忍ひ出、夜も過ち寝る事もなく迷ひあり〜

○廿八日、兩村之内男たるもの老人もなし、其上家内女子供も加半逃去リ、岩瀬・宮代・前野・新加納・三ッ池新田・鷺沼・各務・須衛・伊吹・古市場等親類之内、或は入魂の方へ隠レ居申候、次ニ兩村村役人重立候ものは同村喜内方へ参リ、内談致居候処、熊田村年寄武藏・市兵衛等ふら〜と窺ふ様子相見へ、心ならず又候喜右衛門方は別窓有之ゆへ、各々是へ引移ル、又清助より須衛村庄屋佐右衛門との呼びに遣し、内談致ス、又嶋崎儀助・彦作兩人前野村庄屋億助とのへ内談参り、種々聞合帰ル

又佐右衛門・清助・村役人一同・喜右衛門方にて段々相談之上、弥々出府一定、出府人は嶋崎庄屋儀助彦作、野口村庄屋金左衛門兼藏・九兵衛、兩村にて都合五人今夕直ニ手廻シ、明廿九日未明出立之筈、御江戸表願方之儀は何レ馳込ミ御駕籠訴之積リ、願面等は清助・佐右衛門より内談咄シ合而巳、彼地にて認メ可申筈、猶亦此方にて願書拵へ、出来次

兩村小前一同睨と一決

扱大樹寺出役中は番非人共には門番杯申付、其外取次内調役等迄敵重手合致シ、兩村之もの種々工風を致し呼出候え共、逃隠レ一向手不台、依之其夜五ツ時頃清右衛門方を手始メとして、年寄次吉・庄屋善平・百姓代萬右衛門、嶋崎は百姓代兵藏を始メとして、庄屋儀助・年寄民藏・儀兵衛等、町田・松原・横山・河合并杖兵衛其外下役共不残召連、兩村右名前之者家内妻子召仕等、夕飯給べ可申と存候頃より、大勢大声鳴わめき、夜中着之儘にて追出し、土藏住居家戸側不残五寸之釘ヲ以かたく打付、戸ノ申付、最早夜明前相成候付、大樹寺へ被引取候、扱兩村村役人重立候もの清助方忍び居窺ひ候処、清右衛門方始メ家内は女房子供召仕等迄心ならず留守致居候処へ、出役押入、大声権柄にて釘付戸ノ致、あられなく家内之ものを追出し候ゆへ、女子供は泣やらわめくやら、妻子銘々別レわかかれに、或敷或は林シ田畑之小路しわかちもなく、思ひ〜にちり〜に逃散リ、清右衛門方手始メゆへ混雜不及申、其外逆も老年之親相残候杯難渋いふ方なし、清助方より野口・嶋崎程近キゆへ釘打音、又女子供叫聲之声聞へ、種々之心痛患毫に尽しかたし、推ル処熊田村は御請致し、思召叶ひ候ゆへ、兩村之もの何

第差送り可申筈にて、取ルものもと不致儀助儀は佐右衛門方より出立之積リ、猶明朝迄江戸表之模様追々咄し致し、内談之筈にて佐右衛門同道参ル、野口村金左衛門は今夕三ッ池新田舅の方より出立之積リ、兼藏・九兵衛兩人は下各務久六方より出立之積リ、彦作老人ハ明早朝常体之身拵にて出立之筈、右は熊田村より色々氣を附ケ候ゆへ、出府致候儀陣屋其外へ相聞候ては不宣と、古市場又村方等より忍ひ〜に出立、道すがらハ大伊木村之渡シを越へ、向ふ堤を大山へ参リ、本町一丁目芳野屋にて出立之筈にて思ひ〜に首途いたし候、（此間廿四日より一向夜通にて少候しも寝る事なし至て眠たし）扱江戸表落着所は築地寺中應善寺

是は野口村清右衛門成新加納車馬左平次より種々参り、同人と申方可然と、右親類中嶋村久藏之親應善寺へ参り致され候二付、（廻りナリ）寺を便り参ル、尤中山道筋下り伏見宿泊り、甲州海道へ行、三月八日江戸着、但十日振リ扱大樹寺出役も兩村逃去り候故、致方なく河合氏并雄総村治右衛門と申もの召寄、（是ハ更木村法）兩人大樹寺ニ為出張置、村々下役共は兩村之内を昼夜不限廻らせ置、熊田村村役人共は兩村のもの近郷に隠レ居可申間見出可申と申付候哉、昼夜共右村村役人市兵衛杯所々ふら〜と歩行尋、（おぼやかし）扱され候と相見へ申候

○廿九日、清助・喜右衛門・喜内方隠レ居候兩村之もの、追々

にしろべの方へト先引私

○卅日、兩村ニ未タ残り居候女并子供等、なんとなく心ならず
在るにもあられず家内を明けて、追々ニ親類縁者の方へ思ひ
／＼に不残立退ク

○三月朔日

○二日、野口村御本家御分之百姓ハ格別、其外兩村之内男女子
供ニ至迄住人無之、大樹寺へ出役之各々も手段無之故哉、野
口村御本家御分之庄屋銀右衛門一名を呼出、内々中含メ候哉、
庄屋金左衛門父銀次郎は鶴沼宿若竹屋某之同人娘縁付参リ
居候ニ付、是へ逃込ミ、母ハ三ッ池新田ニ同人兄弟縁付有之ニ
付、爰ニ隠レ居候を、右仙藏参リ種々利解申聞、或は誑シ、
或は威シ、終ニ村方迄連戻シ、直様駕籠ニ乗更木御陣屋へ連
レ行、佐々木吟味之上同夕より五日迄三四日之間入牢申付、并
同村百姓代萬右衛門母姉兩人共、仙藏大樹寺出役之前へ連行、
町田・松原・河合各々及吟味候え共、平生誠ニ百姓而已之女
共ヲ種々之礼明ニおよび難儀致ス
翌三日嶋崎村百姓代兵藏妻逃残り居候処、又仙藏参リ、委細
何シ之訳もなく御陣屋へ連レ行、佐々木氏ニ大キニ呵らせ、
其上入牢申付、同夕よりはも五日迄、猶亦同村小前伊藏女房、
岩瀬村之西さび山と申処ニ縁者有之ニ付参リ居候処、熊田村

年寄武藏・百姓太平次兩人参り、右伊藏才御陣屋へ連行、彼

是致礼明候処、至極質素篤実之ものゆへ送腸候哉、吐血いた
し候故、されど其儘ニ差免し返ス、同人儀は至て億病ニて、
殊ニ此節渡世も難儀之ものゆへ、米三升呉レテ返ス、次ニ同
村八十七、九十才婦夫共老人ゆへ逃残り居候処、大樹寺へ召
出シ、種々及吟味ニ候え共、老人之事故致方も無之、其儘ニ
返ス

大樹寺ニ先日より大勢出役有之候え共、男たるものハ老人も
不及手ニ、長々之逗留退屈之余リ、何ニがな手掛りにと種々
之名考を出され候えとも、一ツとして間ニ合ふ事なし、出役
引取も不相成、大勢ニて雑用を費シ、諸入用も追々多分ニ相
嵩ミ可申と被存、氣之毒ニ候

笠松御役所は是迄松下内匠様御在勤之処、御場所替ニ相成、
丑二月廿八日より大津信樂立会当分御預所ニ相成ル
大津・石原
清左衛門様
元ノ三好頼之助、信樂
多
薩長御負持元ノ松五郎治 同八月廿八日より御代官野田斧吉様へ御
引渡シ

乍恐書附を以御届奉申上候

一当御支配所各務郡村々之儀は隣村私領入交り之処ニ御座候、

笠松 御役所

嶋崎村庄屋 佐右衛門
各務村庄屋 宇右衛門

右之趣隣村御料所村々、笠松出會相談之上御届被申上候ニ付、
爰ニ写シ置

○二日、御陣屋より松原武八郎、大樹寺より河合伴七出役、熊
田村役人ニ為致案内、村々下役共召連、兩村之内嶋崎ニて
五右衛門・林内・和藏・儀兵衛・彦作・甚七、又野口村ニて
兼藏・萩藏・其六・友右衛門・佐七・忠六・源之助・庄右衛
門・新六、先達て同様戸メ被申付、扱釘付戸メ被申付候ニ、
馬猫鶏等戸メニ相成、鶏杯ハ日数相立候内飢死候も有之、又
家内有之候ものを拾ひ給へ生残り候も有、馬は外之窓より飼
葉を喰せ、猫ハ我家之内及ぶ丈ケハ喰尽し、其余は隣村之内
盗ミ喰ひ致候も可有之と相見へ、又己が寝たき筋杯屋根之妻、
或は椽下杯より出入致し、人もなき家を我家と思ひ、常ニ住
候も有之、又家出之節より立帰り候節迄行方なく相成、人と
供ニ立帰り候も有之、何弁もなき鶏・獸、迄佐々木様之御取
計ニて不依思ひ及難儀ニ候

然ル処徳山五兵衛様と申御高式千七百石余之御旗本、其御分
家御高五百石徳山主計様と申御地頭有之、御知行所は各務郡
野口村・熊田村・嶋崎村右三ヶ村ニて、御高五百石之処、地
役人専人有之、当二月從江戸表御本家様御役人佐々木惣左衛
門と申私役、更木御陣屋え相見へ被申渡候は、右知行所三ヶ
村再檢地可被成旨、村々え被申渡候ニ付、打驚御断申上候え
共、強て被 仰付候故、熊田村は御請仕候由、野口村・嶋崎
村は御請不申候ニ付、二ヶ村之村役人戸メニ相成、其外百姓
共逸々吟味と被申、如何成儀ニ可相成も難計と存、野口・嶋
崎二ヶ村之百姓共不残家出仕、就夫家内之もの御捕メニ相成
候風聞故、妻子一同夫々縁者の方へ立退キ、二ヶ村ニ為亭
主ものハ勿論、女ニ至迄家出仕、依之地役人并御本家役人一
同昼夜被相廻候え共、村方ニ専人も居不申、右二ヶ村之庄屋
共は早速江戸表え出願之趣風聞仕候、他領ニ御座候え共、隣
村余リ騒動之儀ニ付、此段御届奉申上候、以上

文政十二年三月朔日

各務郡前野村庄屋 億 助
北洞村庄屋 榮 助
伊吹村庄屋 文 藏
古市場村庄屋 源右衛門

扱出役中より差図ヲ以、嶋崎之村中か郷藏之前ニ式間長ニ梁九尺計之藁葺之小屋を建、桐野・更木・大嶋三ヶ村之下役共、両村之内昼夜為相廻候、番小屋ニテ尤番非人共より給へ物相願候処、大樹寺出役之下知ニテ野口金左衛門・嶋崎儀助方之士藏を押明ケ、俵物を取り出し給へ候由風聞有之、殊ニ儀助方ハ番小屋模寄故、野菜は軒廻リニ有之候漬物類、又味噌部屋ニ入、味噌溜り類取出し、菜大根は門前之畑或は屋敷之内ニ何レ之家も貯へ有之、右番小屋を拵へ候節も、儀助方棧竹・棧杭・藁等持出し取繕ひ、同人方之あらし様大かたならず、儀助其外隣家之もの右を見聞致シ候ハム、咄かしやかましく候半に、家出致シ有之ゆへ、他所之人拵往返通行見聞之噂而巳、乍併立帰之節万端相改候処、右之任合ニ候、去ながら伊吹・古市場・野口三ヶ村之下役共ニは申付置、右番小家へ為携不申候えとも、外村々之番非人共、或は助役、或は見舞拵と申、日々番人之市を成シ、依之儀助方万端之あれ是ニテ推察あるへし

○三日、先日出府首途之節、漸々之手当ニテ出立致候故、清右衛門・五右衛門・勇右衛門三人連レニテ中嶋村久藏殿清右衛門ニ付え参り、金子借用致、直ニ江戸状相認メ、金子も封中致し、翌四日勇右衛門・萬右衛門名古屋飛脚貝谷權左衛門へ持行、

様々諂ひ・追従を申、其外水夫并人足諸向賄ひ方万事差支無之様熊田村より出し、依て入用等相嵩ミ、末へニ何方より出之可申拵と、二ヶ村噂申あへり

又勝手向キ野菜等拵へ候鍋引すりのもの無之、日外より野口村新五郎河合氏と同居ニ相頼、勝手向之世話担任セ有之、同人至て落付ものゆへ馬鹿の様成願付ニテ出役、談示向キ等障子・壁越シ、或は座敷先キ拵ニテちら／＼聞取、両村之内え夫々之閑者有之、申越ス

又先達二月下旬より大樹寺境内石かけ積ミ・堀渡へ竹之根穿り等修覆ニ付、右之仕事渡シ普請ニ致し、引請罷有候古市場喜平次と申もの、右普請ニ付毎日右寺へ仕事ニ参り居ル此喜平次と申ハ首内類なり依之俄之事拵同人より折々内通等致呉ル

○六日、少林寺之内寄合、清右衛門・治吉・萬右衛門・民藏・五右衛門・勇右衛門、古市場清助等也、段々内談之上江戸願書趣意而已書取、江戸状認メ、尤新加納村太藏・太平清右衛門イ次兄弟ナリ助筆相頼、夜通シニ相成ル

扱何事によらず清右衛門・治吉・五右衛門・林内・勇右衛門・民藏・萬右衛門等両村引請、万端差はまりよく相談被致、又金子賄方等は前頭申通り清右衛門重立取賄、民藏も猶差添、工人被致候

且金子賄方等は清右衛門模通り自由宜クニ付、江戸送り金・国方入用等引請ニテ出情相働ク

○四日、清右衛門・民藏・五右衛門・新加納少林寺を内寄會席ニ相頼ム、右寺ハ民藏旦那寺ニテ其因縁も有之、殊ニ庫裏方丈手広ニテ間敷も有之大地なり、内々相談等案氣ニ相成、大きに宜敷、在家ニテは万端手狭ゆへ、大勢出候えは自高声ニ相成、外々へ内談相洩レ候ては一大事と、種々心配大かたならず、先日より大勢之もの一ト夜二夜ツム所々泊り歩行風聞承り候処、熊田村之内・野口村御本家様分之内にも佐々木ニ諂ふ閑者も有之趣粗及承り、万事之内談佐々木へ相洩レ候ては一大事と必至と相隠シ

江戸状出ヌ式拾両差送ル、両村ニテ女三四人被召捕、入牢申遣ス

○五日、更木村甚右衛門此度御召出、御分家御用人格被仰付候趣、三ヶ村之御触有之候処、大樹寺ニ日外より出役有之候、町田・松原・河合氏・雄總村治右衛門等大キニ仰天致し、如何ニ御召出ニ相成候哉と評儀最中之処へ、直ニ坂井甚右衛門大樹寺へ出役、夫より右各々右寺逗留是も一回不思議ニ存候之共依々木之謀計といふ事先ニ委シ又熊田村役人并野口村御本家様御分庄屋銀右衛門・和吉等、先達てより日々毎朝大樹寺之御伺立替り両三人宛相詰罷有、

又古市場清助は先月廿四日夜一乱之初発より願書其外認メ物等差はまり世話致候ニ付、何事ニても寄合とあれば不參なく出ル

○七日、国方近郷之内ニも閑者有之趣、猶亦江戸表ニも佐々木氏悻共有之ニ付、閑者ヲ以出府人之旅宿等聞出シ、途中拵ニ不意ニ召取、入牢打擲等ニ相成候ては迷惑ニ付、油断不相成趣江戸状出ス、昨日認メ今日萬右衛門并兩人名古屋へ持行

○八日、今日迄少林寺ニ右之連中寄會居不引、清助は村方ニ御用并向キ并御膳糺組合入用組合請割等差掛り候ニ付婦ル扱出府致候人々も二月廿九日出立故、遅クとも今日比は江戸着あるへし頓て吉左右之文通も可参拵と指を折り日を算へて相待、猶亦築地應善寺様御世話被下、又出府人之内ニも彦作・兼藏拵一ツ騎当千之我武者、殊ニ出立之砌も出府人各々命にかけても願付可申と勢ひ込シテ首途致候ゆへ、定て彼地着早々御駕籠訴、又寺社御奉行所へ馳込ミ訴等致し可申拵と、銘々思ひ／＼区／＼ニ噂申合ひ、東武之使相待ツ

○九日、清助内々ニテ引籠リ、江戸願書下相認メ、此訳は江戸表ニテ如何体之願書相認メ候も自由自在ニ候え共、出立之砌余り／＼早急ニ出立有之候故、出府人も一件之趣意、前後混雜は勿論尤ニテ、只願方之大抵而已承知致出立、殊ニ出府各々

之内も万事ぬかりは無之候え共、文才等達者にて格別勝レ候人も無之、願方相惑あやまひ候ては一大事と存、当地御本家御知行所大難決之始末より、佐々木氏多分御用金再検地打出は増高、見取本高入、吟味格外手荒之取計、打擲、入牢、牢死、強氣無慈悲非道之始末、有体具書取、江戸表へ贈ル、且亦此願書模筆して笠松捨訴致ス

○十日、江戸願書出来付、此趣を以笠松御役所え不知人可致捨訴ト、古市場源右衛門名考付、別右願書相認メ度、清助認メ候ては右村方笠松御配下村故、同人手跡相知不可然、依之筆は須衛忠藏、久々里之浪士相馬有九郎と申は右村之内縁有之、当時頼天進にて住居、翌文政十三年春御召返シニ相成、頼天進は頼天進と申仁、同村佐右衛門より相頼被與、十一日迄相掛ル認メ、但し喜右衛門方宿

乍恐以書附奉願上候

一徳山主計知行所各務郡嶋崎村・野口村・熊田村三ヶ村にて高五百石之内、高貳百石嶋崎村、高百五拾石野口村、右両村百姓共奉申上候、私共地頭所之儀は是迄河合伴七ト申地役人老人在之、村方支配取扱、尤年久敷地頭所勝手向村仕送り仕、地頭所差支無之様相動来り候処、去ル末年村瀬平四郎様より被為入御養子、右付御同家御役人永井半兵衛殿地頭所御

付候儀、打驚不安心奉存、尤徳山五兵衛様御役人佐々木宗左衛門殿と申は一昨々戊年より新規御抱にて同郡更木村徳山様御陣屋へ罷越、右御知行所高貳千七百石之内岩知村・桐野村・更木村・大嶋村右四ヶ村田畑は勿論、居屋敷并寺・道場・境内。至迄、不残縄張被致再検地、本田畑打出之分は増高、見取場等は新高入、其上石盛を上ヶ村之高辻相増、猶亦其以後も御冥加金と号、見立用金或高用金推て被申付、聊相違仕候歟、又は抽御願申候者、其外何事にも無用捨、無差別手鎖申付、其儘為致牢舎、折々呼出、嚴重之及拷問、依之手足不具足相成、御百姓も得不仕ものも出来仕、中は拷問つつかレ牢死仕候ものも有之、猶亦關所追放、其上逃穩候ものは、村々差置候非人番共を呼集メ、為召捕、又拷問之節も右之もの共敵敷為致打擲、銘々心外を忍、殊大造之御用金故、田畑は他村へ出作売渡、山林四壁之竹木は勿論、居家等迄銘々思々々売払、徳山様御知行所村々は何ソとなく淋敷相成、其上堤川除等為手当之川岸山裾田畑地先等生立候木類迄、不残引上、売払被申付、差当テ御堤川方之手立も相見、誠必至難決難申尺趣、日々噂及承、私共村々も御本家徳山様同様被申付候は、目之当りと奉存、殊手鎖拷問等之難を恐レ、村役人始無愧姿を隠し、依之居家裏表釘付之戸差統

備相成、下知書ヲ以去々亥年私共村々え出役有之、知行高五百石之内え為高用金と金百兩被申付、其上村々之内村役人は勿論夫々見立、用金小前末々之ものまで被申付、都合金三百四拾兩差上申候付ては、先代より持伝候田畑他村出作え売代成、少し之生立候山林或は四壁之竹木等売払、難決心配仕、漸々取賄、日限通差出候処、其後右永井半兵衛殿去子秋御暇相成候て右納仕候金子も其後如何相成候哉、地頭所勝手向凌キ相成候共、駈と承知も不仕、不安心奉存候処、当丑二月中又候村瀬平四郎様御役人町田喜兵衛殿并御本家徳山五兵衛様御役人佐々木惣左衛門殿、右兩人当時兼役にて出役有之、知行所村役人不残御呼出有之候へ共、右永井半兵衛殿同様之儀出来申候ては、先達て之用金にて村々必至困窮之上、猶亦難決相嵩、迷惑至極奉存、再応御断之願書差出候処、推て御呼出。付何様之用向共不安心奉存、地役人河合伴七殿之内々相伺候処、呼出及遲滞候付、内分と申儀無之旨被申聞候え共、一向テ相尋候処、呼出及遲滞候付手鎖可被申付間、其心得を以可罷出旨被申聞候、其上知行所田畑共再検地可被致由、噂有之、私共村々御検地之儀は慶長十四年本田豊後守様御内小西喜三郎様御検地にて右帳面写ヲ以村々是迄取計来り候、唯今至リ地頭所より再検地被仰

候、組頭並小前之ものも及承り、村役人同様強氣嚴重之取計。畏恐レ、村方となく隣村となく野山杯えも姿を隠し候処、是亦村役人同様前後釘付之戸メ、妻子老人等而已相残居候処、右之者共之内妻老母等拾五六人被召捕候付、其余男女老若残り之もの又候姿を隠し候付、猶小前之ものも追々戸メ相成、依之隣村縁者杯へ不残姿を隠し申候故、村々之内人数老人も無御座候、別紙願書是ハ二月廿五日河合伴七殿へ向ケ差上候、当時願書なり笠松は右願書相認メ、御書新見御召返之御役人御支配御免可被申付之候へとも事驚き故爰不記も乍請取置、前頭之通り居家裏表釘付之戸メ、且亦家出仕候節も差掛り火急之儀付、家内時候飯米着類等迄其儘差置候事故、迷ひ歩行候内は給物も相見キ、中は路頭迷ひ候ものも有之候え共、戸メ被申付候故、立帰候ても飯米持来り候儀も相成不申、猶亦村方へ立帰候へは直様被召捕、牢舎拷問之札明を恐レ、誠イ所無之、進退爰極り申候、勿論畑作仕付時も差掛り、土埋置候種類等は腐腐、田方苗代種当勞農業繁多之時分柄にも差掛り、私共村々は中山道鶴沼宿定助郷村候えは、最早追々諸御通行時分御伝馬先キにも相成、此段何分も奉恐入候え共、不得熱事右体之仕合御座候、依之無是非差越御願申上候段奉恐入候え共、何卒御威光御憐愍ヲ以急難御救被下置、新規御抱當時御雇等之御役人は勿論、別て佐々木惣左衛門との出役

は決て御断申上候、尤地頭所之儀は是迄之通惣百姓申合、可相成丈ケ、不依何事、聊御差支無之様可仕候、依之不願恐多も捨御訴訟奉申上候、乍恐御警察被下置、畏御慈悲ヲ以右願之通り御聞濟被成下置候ハは、安緒^(場)御百姓永々相統仕、幾重も難有仕合可奉存候、以上

三月十二日

各務郡

野村

村役人

惣百姓

笠松 御役所

○十一日

○十二日

○十三日、五右衛門先日之願書懐中致、笠松へ行、此間九日。

御料所村々内御膳料引請納入用請勘定、会所古市場喜右衛門方相頼、会合有之、右ニ付武儀郡山田村庄屋清右衛門近日御用向キニて笠松出張之由咄有之、左候ハは幸イ之事故、徳山一乱捨訴仕度ニ付御取持被下度趣、委細佐右衛門・源右衛門・清助等より相頼ミ置、依て五右衛門笠松本町平野屋山田村清右衛門旅宿ニ付、同人へ尋行、早速取持、首尾能ク御役所之白砂^(州)へ投ケ込ミ帰ル、早速御元ノ御目ニ止リ拾ひ上ケ、各務

郡御料所組合郡中惣代前野村庄屋億助被召出、徳山騒動一乱之始末御尋^申捨訴状有之訳合御咄シ、尤億助よりも両村家出致候一件、元来佐々木惣左衛門より此度之騒動差発候訳合、隣村ニ付見聞之処笑止千万ニ存ル趣、委細申上候処、御役所ニて御調へ之上、先達て隣村より届書・捨訴状一同江戸御屋敷

へ被差遣、直様江戸從御役所より御勘定御奉行所へ御達シニ相成、依之先達て出府致候願人より此願書先へ廻り候と被存候

○十四日、右捨訴其外内談有之、両村村役人其外共清助方へ寄合^(合)

○十五日、今日も清助方へ寄合^(合)

○十六日、右同断、替ル^(合)寄合、江戸便りを相待

○十七日

○十八日

○十九日、又清助方へ寄合^(合)、江戸便りを相待候え共只今ニ便リ無之

○廿日、此間中江戸状之来ルを、村役人は素より、所々え逃散リ隠レ居候両村之小前一同、日々ニ相待候え共、江戸状不來、ほつと退屈致し、又古市場清助方へ折々寄合^(合)致、同人一同評儀区々ニ、余リ状便延引故、江戸表ニて御本家并御地頭所

へ出府人之内若被召捕候歟、又は願筋不都合之儀哉尚亦御本

家ニは佐々木か梓^(兄)兩人^(弟)も有之ニ付、此方之願筋^(問)

者ヲ以先へ聞取、出訴以前ニ召捕候歟、乍併出府五人不殘召捕も致ス間敷、若両三人召捕ても残り之人有之、左候ハは其者より早速早便リヲ以書状ニ可被申越歟、又は早々興訴可

致ニ何分出願^(等)等と評儀^(一)一決致、依之両村之内ニて宍人飛脚

同様ニ出府致し、見届ケ之上、出訴差急キ候様催促人差遣シ

候方可然と内談致、出府飛脚は誰彼と評儀^(二)之処、野口村新五

郎と相決、今夕是より直様出立可致と、其席より身拵へ、夜

八ツ時前ニ相成、夜明を相待出立致、尤笠松捨訴状下書為持

遣し、彼地之模様見届次第、帰国可致引合ニて出立

又御陣屋并出役よりは家出致候もの見付次第、召捕入牢可申

付杯、追々敵重吟味有之、右其外いろ^(一)相談ニ今朝より出

会之処、漸々江戸行相定り、明廿一日未明新五郎出立を見送

り、昼過ル比迄寄合居、夫より安清并五右衛門其外四五人思

ひ^(一)別散ル、扱今廿日朝五ツ時過怪數浪人古市場源右衛門

方へ参り、徳山騒動遂一承知之振合ニて、御上より之穩密役

人之風体と見せかけ大小杯^(一)包ミ、合点之不行もの参り、

委細源右衛門へ相尋候え共、難心得もの故、何事も不取合、

其夜喜右衛門方相頼、一宿為致翌廿一日朝四ツ時比立出、行

方不知、右等之儀ニ付ニても彼是及心配

朝五ツ時、外神田作場町より出火、夫より柳之土手西詰メ御藏之東へ飛火、鎌倉河岸迄焼抜ケ、東ハ馬喰町辺不殘横山町辺・淺草御門ニて焼止り、夫より辰巳之方、元柳橋辺より兩國廣小路・薬研堀・濱町・カキガラ町辺不殘、永久橋辺よりレイガン嶋へ焼抜ケ、又南ハ御城東側下町向不殘焼通シ、芝口新橋松坂屋ニて焼止り、東へ築地辺不殘、鐵炮^(一)測へ焼通、夫よりツク田嶋へ飛火不殘焼、近辺ニ掛リ居候、大船六七艘焼失セ、其辺之小舟共は勿論也、其外橋之不殘焼、通路相成不申、永代橋焼落、死人不知數、右ニ付御大名様其外ニても上下共^(一)成事共筆ニ不殘キ、前代未聞之大火ナリ、其後も引続キ所々大火有之、御江戸も一円焼ルト申候

○廿一日、

○廿二日、前野村億助へ江戸表願方之振合、其外何角承り合申度、清助参り候処、笠松へ出張留守故、又同人笠松へ参り、種々承り合候え共、大變故如何相成可申とも相知レ不申ニ付、何事も具ニ不被申聞、乍併何分ニも両村は差当り難儀之事^(情)故情々出情取持可被申趣被申聞、夫より帰リニ新加納東坂太

藏とのへ立寄候処、江戸状中嶋村久藏右大藏之向参り、為持被差越、一見之処、於江戸表應善寺様御世話にて、寺社御奉行所松平丹波守様へ信州彦作出願致候のみ、出府人金左衛門相認メ、三月十六日出之状至着、同人馳筆ニ相認メ被差越候。付、何事も委細相分り兼如何と猶々心配、今朝清右衛門は江戸便り延引ニ付（疑念）キフへ参り、御園町葛屋杯へ書状参り居候半と、所々相尋ニ態々キフへ行、葛屋にて承り合候処、外ニ老通江戸状参り候敷、睨ト不相分、段々相尋候処、江戸より中嶋村久藏との名宛ニ参り候処、平中嶋と嶋中嶋と間違、宮飛脚嶋中嶋へ此方書状持越、宛名違ひ候故、又宮宿へ持帰り、依之先へ出し候書状と後先ニ相成、翌廿三日又々キフより取寄、一見之処金式拾両受取之趣、外ニ彦作松平丹波守様へ宿より案内有之、出願之趣而已。

○廿三日、岩瀬村八左衛門、先年地頭所御勝手向御仕送り被致候因縁も有之故ニ哉此度之一件両村騒動氣之毒ニ存間、取憂可申と清助方へ向被参候ニ付、同人より両村へ申通シ、内談可申趣申答、八左衛門帰宅被致候、尤八左衛門之河合氏より内談引合有之事と推察致候、依之村役人并重立候小前大寄合、喜内・喜右衛門両家へ寄

○廿四日、昨日之盛寄合不引、扱先達てより大樹寺へ出役之衆

差添一同田畑見廻り、其外両村方端心配可致由申渡ス、畏引取新五郎能々思ふ様ニは此上銀右衛門へ一同心致シ同様ニ相成候者ては、伯父伴七同腹ニて両村之取違を猶荷胆致候様相成、両村へ対シ面目も無之伯父伴七と同腹ニて無之申訳旁、江戸表へ飛脚ニ参り候も可然と思案一決、右之訳合、両村之内某ニ極内々ニて自分之申訳旁、実意を語ル

○廿五日

乍恐書付を以奉申上候

一此度就御用、私共三ヶ村村役人共不殘今廿五日五ツ時罷出候様被 仰渡候趣、河合伴七様之向被仰渡、承知奉畏候之共、私共三ヶ村は、新規御抱、或は当時御備ニ被 仰付候御役人様より被 仰付候儀は、村々小前納り兼候ニ付、無摠御用向御断奉申上候、既ニ去ル戊午 御本家様御役人佐々木惣左衛門様へ向 御下知書ヲ以御用被 仰付、再応殿重御召出被 仰付候之共、新規御抱之御役人様ニ付御免御願申上候処、又候去々亥年永井半兵衛様御備被 仰付、御出張有之、御召出候之共、同断御免御願申上候処、推て御召出ニ付、無摠罷出候処、御高之内ニて金百両之御用金、其余村役人共其外之も

中も、両村不殘家出致候ニ付、老人も手に不合、其後仙藏ヲ以老母其外女共を為召捕、吟味等被致候ても、是以何ソ之役ニも相立不申、雑用を費し、無益之日を送り、退屈と相見へ、石流名考之佐々木氏も致方無之、大樹寺出役之内より発端仕出し、八左衛門を取憂ニ被差越候も相知レ不申、何分にも江戸表より儘成ル状便不承以前は、何事も断り可申、左も無之候ては出府人之手前も相濟不申、何レ取憂断可申と、相談一決、今日も又八左衛門との被参候之共、委細何事も不申、取憂速に断申遣候

扱熊田村より只今ニ至り大樹寺勝手向取賄ひ、毎日村役人立替り詰番致、出情相勤被申候へ共、余りノ長逗留ニ相成候故、此節は内実迷惑ニ被存候事と推察致、内々噂申事ニ候扱野口新五郎儀先日十八九日比ニ坂井甚右衛門え庄屋銀右衛門より申上候は新五郎を御召仕被置候は不可然、万端同人より下々迄相洩候様被存候趣申上候敷、常体ニて有之処銀右衛門参り、坂井氏と暫ク咄し有之候処、坂井氏新五郎を呼、被申聞候は、扱長々之間種々世話ニ相成、今日より暇遣し候間、引払可申旨被申聞、依之一札を述、大樹寺を引取、翌日又新五郎を呼出、被申付候先達てより田畑耕作閑等不埒之至、早々取掛り手入可致旨、銀右衛門へ向申渡置候、猶此上同人ニ

夫々御見立御用金被 仰付候ニ付、御殿様之御儀ニ付難有御請仕、右御用金取賄等は田地を譲り、少シ生立候山林も伐取、或は四壁之竹木等迄売払、漸々ニ取賄、御日限通り上納仕候処、右永井半兵衛様御暇被 仰付、依之折角難波心配仕、先代より持伝候田畑等充代成差上候金子之儀も、如何相成候哉、睨共承り不申程之儀御座候之は、此度迎も奉恐入候之共、御召出御免被仰付被下置候様奉願上候、乍併 御殿様より被 仰付候御用之儀、聊御違背可申上所存毛頭無御座候之共、佐々木様より御本家御知行所御取締り之振合ヲ以、手鎖牢舎拷問等敷敷被 仰付、中ニは手足不具足之もの出来仕、却て御百姓相統之不為ニも相成可申、左候ては 御殿様之御為筋ニも乍恐往々相成不申様奉存候、尤 御殿様御儀は結構之御幕方は行届不申候共、百姓方可相成尤は出情仕、何分ニも御不自由無御座様仕度存念ニ御座候、何分願之通り御聞濟被成下置候様、幾重ニも奉願上候、以上

丑二月廿五日

三ヶ村
村役人

町田喜兵衛様

右願書は先達家出以前ニ相認メ、再応差出相願候之共聞濟無

之、終不納、兩村一同残^(念)存、此節倉知村御陣屋ニ町田氏御在陣ニ付、不知人捨訴致候、此願書写江戶表へも差送り置候、彦作初テ馳込^(念)訴致、御利解被^(念)仰聞候節、此願面之趣意申上候処、御留役様より成程其方共願は全ク実意^(念)にて寄麗成願筋なりと御答被^(念)仰聞候由ニ候

○廿六日

○廿七日、両村家出致候より最早一ヶ月も相成、田畑耕作も手抜ケは勿論、麦作肥^(念)シ等も手廻し能きものは肥致候ものも有之、大かたハ麦肥以前ニ逃去り候ゆへ、田畑の麦も真赤^(念)に相成、春分の土用も明前に相成、田畑之草は日^(念)ノ潤雨^(念)に生立、うね^(念)との扶間は土の色はなく、芝野の様に茂り合ひ、村之衆中見るに不堪、折角是迄に生立候麦作、此儘に耕作不致打捨置候ハは、麦の立毛もみのり申間敷と、伊吹・古市場・寺嶋まで誘ひ合ひ、伊吹・古市場兩村は家並ミに申触、村方之内東西に分ち、今明両日に耕手伝可申と、野口・嶋崎兩村之耕地田畑平ラ押し耕作致されども、両日ニ大どうりハ耕出来、其余飛鳥村よりも手伝に参り被與候

○廿八日、前日同断

○廿九日、先達てより倉知村も六ツケ敷儀被仰出、右ニ付町田氏兩用兼役出張有之、兩村同様に彼是と差違レ有之、尤先達

見へ隠れニ当人も差添、昼夜に不限相掛りされども兩村不残芋種揚相済

○五日、喜右衛門方へ寄合、最早稗種水入之時分ニ相成候へ共、此上兩村如何相成可申共相知レ不申、乍併植付差掛り候ては間ニ合不申、未タ從江戸状便も無之候え共、先ツ稗種手当ハ可致置相談、左候ハ、苗代田ハ古市場・伊吹之内ニて銘々田を借り蒔入可申管、夫々手当致

○八日、大樹寺出役之衆中、坂井甚右衛門へ跡詰ニ残し置、外町田・松原其外各々引私ニ相成ル、河合氏詰合勿論也

○九日、先日より古市場源右衛門発端ニて河合氏へ内々ニて参り、相談之上兩村男之分立帰リ、田畑耕^(念)種々蒔付時^(念)も差掛り候間、田畑手入方可致管ニて、源右衛門を始、寺嶋善六、須衛村佐右衛門其他、喜内・喜右衛門・清助等也、重と源右衛門老人引請、善六差添跡之ものは名目而已也、同日七ツ時比より清右衛門裏之方畠中之神明宮之杜^(念)りえ寄合之管ニて、村役人は素より兩村小前一同追々出會之処、彼是遅刻に相成り、日の没前也、模寄より割木杯持寄、木の枝を折、落葉を掻寄、篝を焼キ、相談之処、大勢之事故、又例の通り了管区々ニなり、此度之一件一途に差はまり候ものは立帰リ不宜といふ、又小前之内末々ニは耕^(念)蒔物等も差掛り候ゆへ、立帰可

てより出府致し、此節一兩輩地頭屋敷ニ入牢有之、右ニ付相頭山縣郡跡部村ニ惠利寺と申有、此寺僧^(念)右一件ニ付、和尚先日出府被致、村瀬様へ御直ニ御陳言可申上了管^(念)ニて出府有之由、左候ハは徳山一件も尊寺御席^(念)ニ可然様被^(念)仰上、早速事濟候様相願置、倉知村杯之一件も佐々木氏謀策と被存候、右一件杯も不違^(念)毫^(念)毫^(念)略ス

○四月朔日

○二日

○三日、未タ從江戸状便無之、喜右衛門方へ又寄合相談
○四日、右同断、相談ニて清助方へ寄合、芋種腐^(念)り可申間、堀出シ相談、芋種揚ケニ参り候ハは出役見付出シ召捕可申、殊にさつま芋埋置候ものは老人ニても金貳兩三兩位ツ、銘々埋^(念)有之事ニ付、如何して堀出可申相談評儀まち^(念)也、勇右衛門ハ夜ル^(念)盗^(念)ンであげんといふ、林内は閑者ども数多有之ゆへ、若見付られ召捕られ候ハは、兩村之一大事なりといふ、勇右衛門ハ自分老人しても金五六兩分も埋^(念)有之、当春一ト賄ひ之引当^(念)も致置事ゆへ、残念なりとて執心する、林内申候は老人揚始メ候ハ、兩村不残堀出シ可申、左候ハ、見出され召捕れ候は必定と被存、兩方尤之事ニて相談不終^(念)候、依之伊吹・古市場或は大嶋、其外縁者入魂等之族相願ミ、

申方宜敷といふ、出役坂井甚右衛門・河合伴七郎より一同立帰^(念)ニ付、是迄不埒之趣意相立可申旨、取暖源右衛門・善六へ被申聞、其外取暖ハ杜ニ控へ居候処、兩村一同申候は、趣意立等有之候ハ、立帰相止メ可申杯、小前口々ニ申之、源右衛門・善六ももてあまし、其外彼是やかま敷、又佐右衛門出役へ応対ニ参り、漸々趣意立もなんにもなく立帰^(念)り候管、併兩村村役人は未タ東ノ状便も無之、依て始メより立帰^(念)り不申管ニて兩村小前不残立帰^(念)り相調ひ、夫より大樹寺へ一同呼出、椽側に燭台数多灯立、坂井甚右衛門横柄に着座有之、次席河合氏着座ニて、坂井氏より先達てより一同心得違甚タ不埒之条、猶此上耕等格別相勵ミ、出情可致杯、其余御定之通り申渡相済、夜九ツ時過ニ相成、今日昼飯早々より相催し出かけ候処、給物もなく只今迄遅刻致、各々空腹寒ク相成、皆々早々ニ引私、久し振リニて住ミ馴し我家之内、定て寐心能ク、又面白キ夢杯みんと、若キ者杯たハふれ帰ル

○十日、昨夜男の部立郷相済、銘々我家の釘付戸^(念)を押はなし家内へ立入候へは台所より座敷まで鶏の糞だらけ、足の踏はもなく、戸棚の内には麦飯団子に蠶^(念)柴^(念)へ、貯置し俵物桶鉢の櫃は鼠自恣に喰荒し、灰小家其^(念)軒^(念)の廻り腐腐るもの其数なし、門背戸は落葉積り道もわかず草生茂り殊故之、春分の

内には年内の薪を伐採り置く事、土地のならハしなるを、蒔付ありし麦作の肥しすら打捨逃散し、百姓向き仕入方万端の貯さへ農事等は申もさらなり、住馴し我家も一ト夜二夜は在にもあらぬ心地なりしが、先ッ立郷(備前)し事の嬉しく其所此所と漸々取片付、それより田畑耕を勤ミ、専一故之働さけるに天地の恵ミ少からず、雨露乾湿の順よく、麦作相応の年柄にて、双邑(備前)のかまども賑ひ、猶女子供又召仕ふもの迄も、其此追々引続キ立帰り、家内は前に替らす打揃ふて、一ト際安堵の枕をひきくし、さりながら村役を始メ末々まで、東武の状便を日夜に待てども今に沙汰なく、如何と心配不少、扱両村村役人は未タ江戸表出願之否、不相分付、小前一同立郷候ても、若亦如何体之儀申付候も難計、右六人之分は表向キ立郷不仕候え共、夜中杯忍び々折節家内へも立寄申候え共、今に近郷之内杯にふら々致罷有ル、しかし女共は男一同差続キ其節直ニ立帰り申候

○十一日、從江戸三月廿三日出シ書状至着、應善寺様御世話にて再応松平丹波守様へ出願可致積リ候処、廿一日前代未聞之大火ニ付、御奉行所も兩三日御休日に相成趣申参ル出火場所板古園等又四月四日出シ之書状着、四月二日御大老水野出羽守様へ彦

へ申参り、夜中ニ御陣内大キニ混雜有之趣、とり々申あへり聞と、一ト入キ参り相止メ、直様馳歸り候処、此方へも状便有之、祝と最中なり右様は是れより故出訴之祝限りなし依之右返事相認メ遣シ訳は、是迄願方閑等不埒明キ杯、種々不足之由數通書状遣置候故、先出訴御苦勞御心配之一札申遣シ、猶亦今一度急々ニ御駕籠訴可被成様之趣、返事申遣ス、扱御興訴之趣更木御陣屋へ申来り候ニ付、大樹寺出役并河合氏一同御陣屋へ出会有之、内談有之由之噂ニは、佐々木氏被申候は、此度之一件主計様より表向キ町田氏へ被仰付候ニ付、貴殿万端可然取計可然、自分は当陣屋ニ居合候ニ付、一件内談申而已也といふ、又町田氏は佐々木氏万事能く承知有之間、同人へ能相談之上表向万端引受可取計フ旨、主計様より被仰付候間、委細貴殿之差図随ひ、是迄も何事によらず取計候ニ付、貴殿引受取計可被申と申、又佐々木より、左候ハ、松原氏引受可被申といふ、松原氏親子は、委細何事も佐々木公御差図准シ万事取計候ニ付、只今ニ至り一件引受相成不申といふ、又佐々木より坂井氏は此度御召出御用人格被仰付候事故、役前之当り前ニ候間、其元引受可申といふ、坂井氏申答候は、手前御用人格御召出は、両村家出致騒動一乱之後御役を蒙り、両村家出ニ付為取締之大樹寺え出役、貴殿より被仰付候ニ付、最

作御興訴致候ニ付、小普請頭長井五右衛門様同日急御登城被仰付、御老中様御列席ニて御引渡之旨被仰渡、夫より徳山御本家へ御引渡徳山御本家より侍老人長井種へ送ル、夫より御本家徳山御御引渡御烈徳山主計様御用人青木文右衛門、村瀬御家米向人徳只久馬、彦山岡助、御本家役人平光平左衛門、藤江藤左衛門、都合六人なり彦作白砂へ呼出、差越願不届之呵有之ニ付、彦作申答候は、縦令私シ命を被召上候共佐々木惣左衛門支配御請不申由申之、夫より虎ノ御門内村瀬平四郎様へ御預ケ、尤繩手鎖ニて召連行、村瀬御屋敷御門之片脇ニ牢を拵へ、入牢申付ル趣申参ル右江戸状式封老緒ニ当着、此節大井川折々出水ニ付文通も延着致候、先日立帰相濟候ニ付、跡相談旁昨十日より今日至る迄清助方へ出会致ス、扱先達てより慥成ル江戸便りも無之ニ付、源右衛門発起ニて佐右衛門・善六其外へも段々相談之上立郷相濟候、一件并両村耕作手伝之事、芋植・小もの蒔等、又第一は江戸表出願閑等延引之儀種々手紙相認メ昨十日名古屋迄遣候処、今十一日駆込ミ訴并御駕籠訴之趣儘ニ状便有之、両村は勿論、最初より内談ニ加り候清助を始メ、是迄万端掛り合之衆中一同大悦大かたならず、手の舞ひ致さぬはかりにて一ト先ッ安緒致候、今朝源右衛門杯キッ西御坊え御追夜前在本如上人参リニ出かけ、更木村之先キ迄参り候へは、人之噂ニ申候は、於江戸表彦作御駕籠訴致其趣、昨夜御陣屋

初より一件之訳一向存不申、各々方ニて引受可然といふ、又佐々木より、左候ハ、地役人之事故、最初より掛り合勿論なり、河合氏引受差配可申と申付ル、河合氏は今日ノ御役相勤られ候而已ニて格別之思慮もなく、素より生質篤実律義カレシキトシヨリもの故、佐々木氏主計様より御下知書預り有之、差当も得不申、筆頭役差配勿論之不及沙汰ニも、各々銘々身通之名弁に言ひまへされ、河合氏独り冠リ之由源右衛門は河合氏と平生至て入寄、右之噂有之由田氏も是迄佐々木ニ誑ウソかされたりと、内々立腹之由噂有之、世に無理なる事は彦作より一応之御駕籠訴ニ、佐々木之名謀イソカを寔可ウソレ恐レ天道ヲをや

○十二日、前野村億助・須衛村佐右衛門其外夫々懇意之世話ニ相成候方へ、昨日江戸より文通之首尾相知らせ、一礼を述る、佐右衛門聞と其儘清助方へ被参、五右衛門・勇右衛門・治吉杯ト寄会、江戸表之首尾能キ噂而已、殊ニ古市場喜右衛門と申は我勢堅固之生質ニて、騒動之始より疎意なく取持深切也、又スエ佐右衛門とののは嶋崎儀兵衛方へ近親ニ縁有之ゆへ健たかに取持有之事勿論なり、今朝より右之衆中清助方へ寄集りよろこひあふ

○十三日、清右衛門・五右衛門・萬右衛門、此間中之祝ウツヒひに清

助ニも一ツ盃を進メ可申と、同人方へ今夕老坪壺有り合之^(中)。豆麩杯^(豆麩杯)携へ、一席催さんと参候処、折節御膳飯割御糺組合村々へ作付申触一件ニ付、スエ佐右衛門とのへ参り、待てとも不郷^(不郷)、無処留守ニ吞ミ帰ル

○十四日、町田喜兵衛殿、村瀬様御知行所武儀郡倉知村へ是も御用金其外百姓方迷惑筋之御用向キニて、先達より出役席ヲ以、地頭所よりも御下知書を預り、此方三ヶ村兼役有之候処、一昨十二日更木御陣屋ニて互ニ身通相談より、此方之御用向キ疎意ニ相成、銘々身通之了管ニ哉、今十四日出立ニて郷府有之候

○十五日、当月九日男之部立郷之翌日、嶋崎五右衛門・甚七、野口源之助、甚六四人之者大樹寺へ召出シ、兩村村役人共未タ不立郷種々御用向キ差支候間、今日より四人之ものへ庄屋代申付ル由、坂井・河合之兩公より被申付、夫より以来聊之事ニも呼出、毎日ノ之召出、甚七・甚六兩人は五右衛門・源之助へ相頼ミ不参勝ニて、源之助殊ニ五右衛門日々之御用向キニて迷惑を致ス

○十六日、扱先年より大垣御預所宿場助成金拜借罷有候処、年々御勝手向不行届ニ付、去ル申酉戌亥子五ヶ年利納滞、彼是相談中之処、二月下旬騒動ニ相成、閑等ニ付江戸表大垣御屋敷

衛門様へ野口村九兵衛駆込ニ訴致ス趣、猶亦同月十三日又候御大老水野出羽守様へ兼藏御駕籠訴致候趣、又同月十一日晚御評定所御腰掛之訴状箱へ、佐々木惣左衛門更木御陣屋出役以来之一全始終、高田野一件并倉知村杯之儀、具ニ書載、箱訴致ス

高田野一件といふハ、更木八ヶ郷之内惣社長墳村手力雄明神神領同様之野方多分有之、八ヶ村之内村々え野方控へ有之、右之内徳山御知行村へ控へ居候野方、往古より高田村へ永小作之処、此節右野方永小作引戻シ可申と、佐々木氏謀策ニて及出入、高田村よりも出府^(出府)専有之、御奉行所ニて先達てより御吟味中也

倉知村一件といふハ、出役町田氏へ佐々木氏より尻込ニ致シ、徳山両家同様ニ村瀬様御知行所村々へ、多分御用金并再檢地可致と申付候ニ付、是亦右倉知村組合より出府致、此節右地頭所へ罷出、入牢等ニも相成^(相成)倉知村御吟味最中なり

次ニ東武え文通取遣り等も、委細要用ニ付、万々一相手方佐々木氏計略ヲ以宮宿飛脚屋、又は途中杯ニて偽り横被取候ては、一大事相漏、難決と存、初メ一兩度は中嶋村久藏とのへ向ヶ宛名ニて出状参り、夫より笠松御用会所へ向ヶ古市場七兵衛^(七兵衛)名宛ニて江戸より来状、又江戸表へは築地御堂御寺内

より御勘定所曾我豊後守様へ御達シ相成、依之御頭長井五右衛門様へ向御沙汰有之、夫より地頭所御糺ニ付利納可致趣、則御請書被差出、依て河合氏へ取賄返納可致旨申参り、五右衛門・源之助兩人召出、才覚被申付候え共、未タ混雜中ニ付、断申不相納、河合氏彼是心配有之、其後又五右衛門・源之助召出、三月分御月次下シ金閑等ニ付江戸表御差支候間、夏成金一同相納可申、尤夏成金上納定例は六月中旬に候え共、此節地頭所払底ニ付引上ケ上納致候様被相頼、夫より打寄相談之処、此度願通相片付候迄ハ、地頭所御勝手向御差支ニ相成候ては恐入候儀ニ付、騒動一件落着迄は御勝手向是迄之通月次上納可仕相談、乍併熊田村は別上納之積り、則金子取調、月次金夏成一同河合氏へ相納候、河合氏大垣利納取賄も出来不申ニ付、三ヶ村月次金之内ニて大垣へ利納被致、月次金不差下、依之地頭所御勝手差支申候、最初より村役人并重立候小前少数之時は清助方へ寄会、惣小前一同大寄之節は喜右衛門方会所ニ御座候

○十七日

○十八日

○十九日

○廿日、四月十三日出し江戸状着、同月五日小普請頭長井五右

應善寺様へ向ヶ七兵衛名前ニて差遣シ、漸々此節ニ至り出府人江戸旅宿麻布西ノ久保新下谷町上州屋源助方ニて、大橋權助^(大橋權助)改名杯と改、幸田七兵衛様杯として送ル

○廿一日

○廿二日

○廿三日

○廿四日、此兩三日之内も少々宛之儀有之候へ共不^(不)還^(還)レ記^(記)之

○廿五日、兩村村役人之家内女共立郷之儀ニ付寄合

○廿六日、村役人家内女共立郷ル、併村役人は兩村共江戸表出訴一件篤ト相分り候迄は、立郷不申、兼々之引合ニ付、只今不郷

○廿七日

○廿八日、出府五人之者行方不知趣ニ表向申成置候処、其外兩村村役人只今ニ立郷不申分ハ、先達ニて五十日尋申付置候処、家出至候ニてより最早五十日余ニ相成、依之帳除可致間、其段請書可差出旨、佐々木より被申付候敷、又甚右衛門発端被致候哉、坂井甚右衛門より被申渡候え共、佐々木氏支配之儀ニ付御免相願候より騒動一件差発り候ニ付、右帳除承知仕候え共、請書一札佐々木氏えは得差上不申、又坂井氏は騒動家出之後御出役有之、在来之村役人共承知・相対も不仕候御

役人故、是亦同様。御座候趣、五右衛門・源之助申上候処、左候ハ、地役人河合氏へ家出致候より只今立郷不申分、兩村にて都合拾老人帳除申付間、其段請書差出可申旨申渡、扱々種々之儀申出、面倒は乍存、彼是申争ひ候より請書可差出と、出会之上相談一決致候え共、有体之願書差出可申方、可然と相認メ差出、其文言左。

帳除キ

筆者 乍恐書付ヲ以奉願上候

一嶋崎村儀助・民藏・佐助・彦作、野口村清右衛門・善平・治吉・萬右衛門・新五郎・兼藏・九兵衛、都合十老人之者、只今至リ帰村不仕候ニ付、私共兩人之御問合、右之者帳除可被仰付旨被仰渡候ニ付、御答申上候、嶋崎村彦作外兼藏・九兵衛三人之者共、此度於江戸表 水野出羽守様之御駕籠附御訴詔奉申上候、九兵衛儀は御地頭所様御組頭長井五右衛門様之欠込欲御訴詔奉申上、外儀助・善平・新五郎三人之者は右御訴詔奉申上候ニ付、如何体之急御用等被仰渡候節、万一御差支ニ相成候てハ奉恐入候ニ付、陰ながら右差添旁々、先達より出府仕候、外五人之者ハ、先達古市場村源右衛門(須重)・村佐右衛門・伊吹村善六、右三人之衆中立入、兩村小

日を送ルと被存

又佐々木氏ハ坂井といふ新役人を取立置、万一分之蒙料を候半節は、兼て工ミ置たる坂井氏。我が罪ミを裸身替り。可致積りと、とり／＼推察ノ噂致ス

次。坂井氏三月五日より御用人被仰付候節は、権柄之勢にて大キ。宣敷候え共、御駕籠訴之後は佐々木すら逃尻り。相成程之事ゆへ、坂井氏も折節一兩日宛更木御陣屋へ引取被申候処、佐々木氏甚右衛門之顔さへ見ると大ごくだうをこわし、昼夜ニ不限阿付候故、御陣屋ニも居るにも居られず、又坂井氏自身之居宅ハ近年逼塞ニて一向手細キ世渡り之由、旁以更木ニも居り兼、何ノ之用も無した、又今朝日より大樹寺出役、右之荒増を坂井氏之此辺入魂之ものに語り、此上口過ニて爰ニ差置候様致度と、内々被申候由、哀之物語り有之噂

右ニ付テハ熊田村万端取賄、猶迷惑被存候事と察候
○二日、出府人は如何被致候哉四月十三日出し之書状参り候儘、廿日余りも一向便り無之、又御駕籠訴ニ付牢舎之ものも如何被致候半と案事、又差したる用向も無之候へ共、此方之模様も申遣し度、委細書綴りて江戸へ状を出ス

○三日

○四日

前御訴訟一件事済候迄、小前一同御預り。て立帰取暖被呉候ニ付、村方取締第一ハ御地頭所月次御定用工入、尚又二月二十七日夜家出仕後、釘付戸ノ之御答被仰付、右御免之御沙汰も不被仰渡、御地頭所御定用御差友ニ相成候ては奉恐入候儀ニ付、隣村となく村方となく姿ヲ隠し相慎罷在申候、右御尋ニ付御答奉申上候、此上帳除被仰付候段、何分奉恐入候え共、江戸表御訴訟中ニ御座候間、御下知被仰出候迄、帳除キ御延引被成下候様仕度、此段幾重も奉願上候、以上

嶋崎村代役 五右衛門

野口村代役 源之助

文政十二年丑四月廿八日

河合伴七殿

○廿九日、昨日之書面、河合氏へ差出ス

○卅日

○五月朔日、坂坂井甚右衛門先達て俄ニ御用人格被申候え共、江戸表へ問合候処、於彼地左様之儀決て無之趣承知致、是も佐々木計策ニて、拵へ役人とは兼て推察至候え共、大樹寺入用之儀は兩村は混雜ゆへ一向差構不申、万端熊田村より取賄ひ、我が身を通れん為に兼て夫とハ乍推シそこ／＼に追從申、

○五日

○六日

○七日、先達て駆込ミ訴兩度、御駕籠訴兩度、相済候ニ付、彦作・兼藏・九兵衛・村瀬様ニて牢舎有之、又上州屋ニ三人之衆中も如何致居られ候哉、一向便りも遠ざかり候ゆへ心配致、色々相談仕候処、先達て彼地之模様為見届ケと飛脚同様之筈ニて差遣シ候新五郎も行留りニ相成、出府大勢長逗留費も相立候事故、不用之人は帰村可申遣、尤文通ニては書触不申、依之五右衛門老人出府致、隙なる人は早々帰村可致相談旁、飛脚同様ニ五右衛門出府之筈、明朝出立、朝五ツ過草履はきにてふら／＼と、江戸行とも見へぬ様に身拵へ致し、清助方より出立、林内・民藏・勇右衛門等五右衛門を送ル

○八日

○九日、萬右衛門倉知村元取弥三郎へ参り、承り合候処、一昨七日同役惣吉婦村致、則徳山一件出府之衆中よりも手紙参り、持参候ニ付、彼地之様子も荒増承り合せ、手紙受取、早々ニ

走り帰り

夫より又例之通り清助方へ不珍寄合、扱江戸状披見之処、牢
舎三人長々ニて甚難儀ニ付、地頭所菩提寺深川寺町長慶寺和
尚相頼、出牢願書差出別紙願書
写有之猶亦右寺へ青木丈右衛門此人、新
徳之役人ニて妻子も有
之、至て篤実な人なりも出張有之、出府之内三人より及対談候趣
申参ル

又牢内三人よりも別紙書状参ル、其訳は急々之内金左衛門・
清助兩人之内ニて、今一応御駕籠訴致具候へは、地頭所より
御上へ御差出シニ相成可申、左候ハ、三人共出牢ニ相成可申
と存候ニ付、兩人へ日々催促之手紙遣候へ共、一向閑等(等閑)ニて
出訴不致具、依て長々難儀之趣申参り候ニ付、返事申遣ス、
最初築地應善寺様預御苦勞候え共、御僧分之事故、万端願方
も和らかニて拂り不申ニ付、此方固方は両村家出致居、差当
難儀故、出願手問取候を迷惑ニ存、右寺も断申、其後跡部村
恵利寺様御出府ニ付、一件種々咄シ合ひ、少シは御世話ニも
相成、又候先日より深川長慶寺様へ相掛り長引、お坊様都合
三人目、右之内可然儀も無之ニ付、お坊様へ相掛り候儀御止
メニ被成度、右寺へ向ケ青木氏出張、出牢願ひ之儀今暫ク思
召薄く被存、殊ニ青木氏へ折々御対談有之候ては御上様へ対
し候ても相済不申様奉存、其訳は地頭役人へ直応対ニて事済

候程之儀ニ候へは、是迄駈込ミ訴御駕籠訴等之差越ニは及不

申、恐入候儀杯と申遣し、其外ニも種々返事申遣し、尤右返
事遣候ニ付、色々相談手問取、明十日ニ認メ十一日ニ出ス
扱最初出府之御江戸表ニ格別便りニ致、内談等致候方無之、
差掛り早急俄之儀ニ付、早速思ひ当ても無之、清右衛門廻縁ニ
付應善寺様を便りニ参り、段々御深切之預御苦勞候処、前頭
之通り御僧分之事ゆへ究竟之御手筋も数多有之候へ共、万端
温和ニて一件拂り不申、此方は差当り必至難儀ニ付、無抛そ
こノ御世話断申ニ付テ、應善寺様へ疎意ニ相成、依之右
寺より廻縁之清右衛門方へ内々ニて右世話断ニ付、疎意ニ相
成、最初より懇情と黙され、迷惑気之毒ニ存由、内状参り候
由、應善寺より被仰越候段、尤之至り誠ニ義理合も相欠候え
共、差当難儀故断候も尤ニて、是非も無之事と内評致候

○十日

○十一日

○十二日

○十三日、跡部村より出府之人新右衛門
先日婦村被致、尤彦作一同村
瀬様ニ牢舎有之ニ付、彦作より伝言等も有之、彦作方へ尋相
見へ、江戸表之振合承り合候処、儀助・金左衛門少々弱り候
様相聞、左候ては一大事、勢を候半と、又々手紙差遣ス

扱高田村野方出入一件、右村より傳十郎・吉右衛門兩人出府、

御本家御知行所より更木村庄屋久藏・大嶋村先庄屋八右衛
門此人ハ先達御本家御知行所一乱之比江戸屋敷ニ被召出、長々入牢、
夫より居成ニ御本家御台所之件番相勤願有ニ付、庄屋代り相成、御評定所ニ

て両村対決之御も、御本家兩人申候相分り兼候ニ付、高田村
御領主安藤對馬守様より寺社御奉行所へ向ケ被 仰候は、徳
山五兵衛より知行所へ出役之者被召寄、御吟味無之候ては万
事相分り兼、右役人早々可被召寄旨、再応御掛合有之趣之由
噂、先日倉知村へ向ケ誂へ参り候書状ニ申参り、左候ハ、佐々
木氏も郷府可致と申居ル

此間中更木御陣屋へ佐々木氏御召状、此節句迄ニ三度参り候
へ共、虚病を構、出府不致、乍併近々出府可致歎、右之段昨
夜人足ヲ以更木村入魂之方へ向ケ、内々万端聞合度候処、右
佐々木一条のみ申参り候ニ付、其趣猶書状ニ一緒ニ認メ、江
戸表へ申遣ス

○十四日

○十五日、両村之内より更木村へ親類有之右内縁之方より佐々
木氏も近日之内弥々郷府と相見へ、御陣内いろノ其手廻し
と思敷事有之由、具ニ申参ル

○十六日、源右衛門発起ニて、清助方へ村々寄合、一向徒事(徒事)
一会なり、喜内も井スエ佐右衛門も出席、事繁きゆへ略之

○十七日、昨日之一ツ会不(須書)思レ敷ニ付、スエ佐右衛門も清助

方ニ泊り居、又今日も出会内談源右衛門・喜内
今日へ不參除ク、乍併大妻小麦も刈
採り、又近日田方植付も取掛り可申、此節は一同農事間敷、
先ツ何事も暫ク相休ミ可申と、各々一会引払
扱今昼比江戸状到来ニ付、一見之上段々相談候処、江戸状ニ
長慶寺も段々延引ニ付、牢内難儀は勿論也、猶亦是レ形りニ
ては逆も相済申間敷、不及是非候間、三度目御駕籠訴可申内
存

又牢舎三人之者白砂(州)へ呼出シ、佐々木氏不首尾之返報ニ哉、
藤江藤左衛門佐々木
仲ナリ青木丈右衛門地頭所之
志也一石幸太夫村邊之
役人、右三
人、何ソ之用もなきに何がなと存彦作・兼藏・九兵衛三人を
呼出、吟味致ス、兩人之申口宣敷、兼藏申口少々申惑ひ候歎、
藤江自身ニ打擲致、并兼藏よりは亦願書類新吾相認メ候杯申
候ニ付、新吾大きニ及心配杯と申参ル

○十八日、徳山五兵衛家来横山茂八郎前野村茂
左衛門也佐々木鹿之助兩人
より先触ニて駕籠老挺三人
人足本馬老走、右は此度佐々木惣左衛門
御用ニ付出府致候文言ニて、十四日出立之先触出シ置、又嘘
病ニて引籠り出立延引候故、扱は江戸より御呼出シ之申訳而
已ニ出立先触杯出シ候歎杯と噂致候処、今十八日弥々出立郷
不致候、右は日外より古市場七兵衛宿方立会役ニ出勤罷有、

右継立人足等取計候ニ付、右宿方より其段儘ニ申遣シ候

○十九日、江戸状を出ス、十七日着状之返事、井佐々木氏郷府候間、事により御評定所ニて佐々木氏と対決、御吟味可有之も相知不申、其段心得之儀申送り、猶亦同人郷府候上は何事ニても油断相成不申ニ付、種々要用之巨細長文ニ申送ル、又此方河合氏杯も佐々木同穴之野狐杯と申遣ス右等之始末不能悉紙開き可見ル

月十九日出シ手

○廿日

○廿一日

○廿二日

○廿三日

○廿四日、日外より雨勝ニて農前畑方手廻し不行届、そこくニて田植ニ掛り、猶雨天ニて水沢山過キ、植付さへ大雨ニて差支候程之仕合、依之雨間を見合セ、田植を休ミ、畑方農前廻シ之残り致候人も大分有之、此節田方植付之どうまん中カナ

○廿五日

○廿六日、江戸状着、佐々木氏も日外より万事追々之尻われ、坂井氏も弥々賈役人と相分り、両村家出拾老人帳除申付候も偽り事と相分り、諸事不都合之儀共有之ニ付、悴藤江藤左衛

門此間中は一向やけもしぎに相成、御地頭所青木氏なども、もてあつかい迷惑被致候趣申参る

此間高田村一件ニ付、寺社御奉行松平伊豆守様之訴答御呼出、対決之処、高田村より申上候は、何分佐々木惣左衛門御召寄候趣ニ承り申候、尤佐々木氏何レ地頭所支配杯決して不相成趣之由申参ル、五右衛門当月十六日無別条江戸着之由申参ル此条初て清右衛門名宛ニて上州屋旅宿儀助と本名ニて認メ参る、依之寄合も始て清右衛門方へ一会致候

○廿七日

○廿八日

○廿九日

○六月朔日

○二日、先廿六日江戸着状有之候へ共、農中殊ニ一件も大半ニ相成候と被存、且下シ金申参り候へ共差急キ候は是而已ニて、外ニ差急キ候用事も無之、先日より鬧敷ニ取紛レ、暫ク返事も及延引、則今夕清助方へ寄合、返事認メ遣ス

金拾両差下シ候様申来り候へ共、相談之上先ツ五両下ス筈、又五右衛門井新五郎飛脚同様之筈、出府之事故、御帰国可然、乍併新五郎帰国候ハ、文通相談等認メ方杯差支候ハ、御

相談之上外様ニて御兩人御引取可然歟、且儀助老人は落着迄取締方御逗留被下度趣杯、其外申遣ス

又御本家様は佐々木氏御暇被遣度思召ニ候へ共、旧冬御収納米払代金五百両も所持致有之ニ付、御暇ニ相成候ハ、右金子手ニ入申問敷、依之右金子誑シ受取候迄延引之由、噂承リ候ニ付、申遣ス

○三日

○四日

○五日

○六日

○七日、江戸状二通一緒ニ着五月廿一日、扱四月廿二日より長慶寺ニひっぱられ、五月十九日迄いろくさまくと申、右寺ニて一ト月余も延引致、牢内よりは日々出願差急候様せつかれ、心配迷惑ニ付、近日之内弥御駕籠訴可致積り、右ニ付四月廿二日

月廿九日長慶寺ニ引すられ、難儀心外之日次申参ル

扱今一通之着状五月廿九日、水野出羽守様え三度目御駕籠訴儀助

罷出候趣、直ニ村瀬屋敷へ送ルと、跡ニて聞

扱佐々木氏廿七日江戸着、又病氣之由ニて殿様御目見へも不致、直ニ居宅ニ引籠有之由

又五右衛門・新五郎も早々帰国可致ト申候え共、最ふ一日く

と差留置候ニ付今ニ逗留、乍併牢内之もの佐々木氏と対決ニても有之候ハ、夫を見届ケ引取申度、尤儀助も是迄之通り村瀬様牢内之同居罷有、都合四人ニ相成ル候由

○八日

○九日

○十日、又江戸状持込ム六月四日、佐々木氏江戸着、直様寺社松平伊豆守様へ着届有之、扱佐々木病氣殊ニ乱心と申偽り、自分之居宅之内居間之四方垂木様之材木ヲ以牢屋之様ニ取膳ひ、其内へ引籠、御呼出有之候ても不出、依之乱心之由相達候処、乱心ニても不苦敷、其儘是非差出候様被仰付、御本家大困リ右ニ付御掛り御留役小田切庄藏様へ横山茂八郎使者ニて大造之目録と相見へ進物目録之正末、差出、右横山氏之供五右衛門血ノ弟松本村勇助御本家仲間相動罷有、委細勇助より極内之儘成咄シ有之、最初御地頭所より佐々木氏へ御下知書御渡被置、此節相返候様被仰遣候え共、佐々木懐中して不返、依之事六ツケ敷、又此節佐々木父子ハ蛙に塩ニて笑止千万之由

又松原・町田杯被申候は三度目御駕籠訴致、却て事六ツケ敷相成、不輕儀ニ付迷惑致ス、左も無之候ても近々事済可致様取計置候ニ、儀助はやまり氣之毒千万杯と申由

又佐々木江戸着之砌、横江・横山兩人一ト泊り先へ出迎ひ、

其節乱心ニ可致相談取究メ、江戸着致候趣ニ候

○十一日、佐右衛門との呼ニ遣し、昨日着状之返事相談之上相認メ、尤一々ケ条ニ返事相認メ、又毎ながら清助方へ寄合、右返事ニ付色々之儀共有之候へ共、中々不能筆愚毫、略之、若御用之御は其手紙御覽候へ

○十二日、昨日認メ候書状名古屋へ出ス

○十三日

○十四日

○十五日

○十六日、当月十日金五両差下シ候趣、右請取之返事参リ、先達て金拾両差下シ候様申参り候趣、金五両差遣ニ付拾兩御工入御下被下候様、呉々相頼遣候趣、金五両御差下、如何之思召ニ候哉杯、不足たらしく申参ル、尤也

扱佐々木先月下旬着之儘、只今ニ乱心之由申立、引籠重病之由、御奉行所へ相達候趣、御開濟無之、追々呼出有之内、粹藤江藤左衛門毎日毎日馳廻リ、御本家御出入医者中川修理と申もの相頼、高田野一件取暖ニ相掛ケ、尤野方之儀は先年より仕来通り、其上高田村出入入用は佐々木より相立テ可申筈、取暖内引合相濟候ニ付、其段松平伊豆守様へ、大嶋村八右衛門・更木村久藏兩人より御伺申上候趣、其日は御下ケニ相成、

も右御開濟強て被相願候趣、四日之間日延被仰付候由、依之佐々木親子は勿論、平光平左衛門其外更木村藤兵衛庄屋久藏文之由杯都て同腹之者共三時之ツキ喰も安からぬ由申参ル

当九日村瀬様御本家へ御入有之、御咄之趣は、佐々木一件公儀迄相知候ニ付、手前共身分シヨクも抱り可申、同人切腹致候趣、又は当屋敷より出奔致候シヨクハは可然、若公儀へ被召捕候ハ、難決と存、心配致ス、猶亦同人粹藤江藤左衛門日外より毎日、何方へ参り候歟、氣違之様ニ相成、飛廻り候様被存候杯、右等之儀御城ニても御咄有之由ニ承ル村瀬様徳山様当時御使番御勤メニ付於御城折々御同腹有之由近日之内御肝煎長坂三之丞様・村瀬様御屋敷ニて牢四人之もの御札有之筈之処、水戸様ニ御不幸有之流レニ相成、追々一件長カ引候

当十日朝藤江藤左衛門儀御前御目通り不相成、猶亦御用部立入無用之事、御門出留、右三ヶ条横山茂八郎ヲ以被仰渡、且表御門之鍵暮六ツ時限り奥へ御引上ケ、併シ裏御門は是迄之通り差置かれ、メリかたなし、推察致候ニ、佐々木親子裏門より出奔致との謎ニて有之候哉

右之様に申参り、委細承知候え共、今暫ク之事ニて一仕事済不仕、長々ニ相成、御江戸は勿論、国方逆も諸雜費も多分ニ相成、互ニ胸中心配仕候

翌日高田村専十郎・吉右衛門兩人御呼出、被仰渡候は右野方一件未タ吟味中之処内濟相願候え共、吟味中ニ付御取用無之間、其段請書差出可申旨被仰付、則受書差上候由、佐々木金子并小田切様杯へ賄賂ヲ以仕果せんとすれとも不能其意松平伊豆守様より筒井伊賀守様へ御内意は佐々木病氣実正ニ候ハ、格別、万一嘘病杯ニて罷有候を公儀より見廻り之者、或は部屋見届ケ杯参り候て作病ニ候節は徳山之家ニも抱り可申旨、御内意有之、筒井様は御本家御当代奥様之御里ニて御実家なり、依て御内意有之由承ル

佐々木氏より御地頭主計様を折々相招候へ共、御本家へ御出無之、又青木氏も佐々木より呼ニ遣シ候へとも、病氣之由申達テ、一切御本家へ不往、是ハ御本家様より主計様并青木氏へも、今暫之内当屋敷へ御入来御無用之由、御直ニ御内意有之趣、右等之儀ニ付候て哉、柴村様御本家御当代筒井様折々御入御内談有之趣ニ候

当月九日松平伊豆守様より佐々木一件ニ付御呼出、則松原清右衛門との罷出られ候趣、先達てより佐々木追々呼出申渡ス処、病氣と申、只今ニ不出、不届之至リ、不苦問駕籠ニて罷出候歟、左も無之候ハは、此方より捕方之もの遣し可申旨被仰渡候ニ付、佐々木病氣全快次第罷出可申候間、恐入候へと

○十七日、右之始末、逐一返事遣シ、并金拾兩差下ス

○十八日

○十九日

○廿日、当月十三日村瀬様四人之者地頭所より出牢被仰付、猶亦手鎖ニも相成可申之趣、御咄御用捨御慈悲ヲ以、本所相生町福田屋長兵衛方へ宿預ケ被仰付、且亦御駕籠訴御咄追て可被仰付旨被仰渡、急々御呼出可有之と存候

佐々木儀は当十五日御奉行所へ御差出ニ相成候歟、又は御召捕ニ相成候歟、両用之内可被仰付由ニ承り候、且佐々木親子御本家は御暇ニ相成候筈之由ニ候

御地頭所定式月次六七二ヶ月分不差申候ニ付、殿様御立腹之由奉恐入、依之江戸表ニおいて借入致し、相納候趣申参ル
○廿二日、定式御月五六二ヶ月分并盆前夏成金、定例は六月十六日之処、御月次一同先達て河合伴七とのへ相納候へ共、御屋敷へは不相届、御地ニて御借入御上納有之候ハは二重ニ相成可申、其外種々返事申遣ス、扱昨日江戸表より大半落着之文通有之、今廿二日両村村役人并重立候もの清助方ニ出合罷有候趣、右之咄し承り合ひ、両村小前夫々之族皆々祝ひニ被参、当春二月より難決之事などむし語り致し、祝ひ申上候

○廿三日

○廿四日

○廿五日

○廿六日

○廿七日、江戸伏着、当廿一日出牢、宿預四人之もの地頭所へ御召出、郷村被仰付、且差越願夫々御咎可被仰付之処、炎暑之時分長々牢内及難儀段被為在御堅察、於国元御咎可被仰付間得其意、早々帰村可致旨、難有御請仕、左候ハ、来ル廿四日弥郷、国出立可致と手廻致由申參ル

○廿八日、昨日之状便清右衛門方へ持込候付、今日寄会出府七人郷着之砌、出迎等相談取極、尤両村之内五六人は太田宿迄出迎ひ之筈、其外鶴沼宿迄迎ひ之筈

○廿九日

○晦日

○七月朔日

○二日、出府七人弥今日九日振りにて中山道筋郷着付、鶴沼宿迄両村小前末々迄出迎ひ、其外寺嶋善六、伊吹・各務及び古市場、清助・源右衛門、其外一件付最初より掛り合候もの不残、鶴沼宿迄参る、出府七人道中無恙郷致、目出度し

一件落着

御知行所一統奉恐悦、双方ノ御地頭所目出度、万歳を諷ふ

一当御知行所之儀は前々より不依何事三ヶ村一同相談取計来り候処、当春出役佐々木氏・町田氏等支配御免願之儀に付、野口・嶋崎両村と熊田村と願方行違、夫より気隔相成居候処、前々より一同取計有之候を、只今より二様相成候儀残念之由、取暖人各々より被申聞、殊当春より一件首尾能相治り候付、御知行一統猶取締として、先達てより御出役も有之候処、三ヶ村両用相成候ては万端取計方も不都合、且は気隔相成居候ては御地頭所御為筋も不相成旨、出役青木氏よりも御心添有之、猶取暖より深切被申聞、依て七月廿六日より取暖始り、八月廿三日迄内済相調候上は、向後より前々之通隔心なく取計可申と、則取暖済口別紙証文之通済口相調 八月廿三日於大樹寺取暖人并三ヶ村村役人は勿論夫々出会之上済口酒有之候

取暖済口為取替一札之事

一当丑春二月御地頭所より当時御雇にて村瀬平四郎様御役人町田喜兵衛殿并御本家様御役人佐々木惣左衛門殿差添、御地頭所ハ三ヶ村え御用向可被仰付由にて出役有之候処、佐々木惣左衛門殿は去ル戌年より更木御陣屋え出役有之、御本家様御

一筒井伊賀守様は徳山御本家様之御実家付、此度之一件筒井様御心配有之、松平伊豆守様え一件落着御直御内意御尋有之候処、伊豆守様被仰聞候は、徳山不束故、此上も閑等致被置候ハは半知も申付候ては相成間敷と、依之筒井様御頭長井様并御肝煎長坂様御招キ、右之始末御内意有之候由一水野出羽守様より御頭長井五右衛門様御召出、徳山分家百姓共再三出願之処、閑等致置、如何之儀哉、早々事済取計可申旨、御呵被仰付、此趣筒井様へ御内意、依之御本家え筒井様并柴村与八郎様御実家ナリ御一同御入有之、五兵衛様へ御呵有之由

一御肝煎長坂三之丞様へ徳山主計様御招キ、其知行所百姓共差越訴、及再三閑等被差置候儀如何候哉、早々取計可被申付、左も無之候ハは半知も可被仰付旨、大キ御呵有之、夫より主計様御自身欠ケ廻り、筒井様・長井様并御間合有之候処、前件之振合相違無之、大キ驚キ、夫より早々事済相成、偏長坂様之御蔭と存候

一佐々木惣左衛門御本家より御奉行所へ御差出シ相成、夫より追々御吟味之上揚り屋へ入牢被仰付、終御江戸御構被仰付候

一御上様御慈悲ヲ以一件首尾能相治り、御両家徳山様猶御改正

知行所村々再檢地縄張之上強氣不法之取計被申付、右御知行所格別之難渋有之候趣致見聞居候処、当御地行所も右同様取計被申付候趣粗及承候付打驚、三ヶ村一同御免御願申上度相談中之処、熊田村之儀出府御訴詔可申上心体も無之、無抛地役河合伴七殿え御請被申上候え共、野口・嶋崎両村之儀は御請難相成旨申立、大勢出府之上寺社御奉行所松平丹波守様并御頭長井五右衛門様え馳込御訴詔仕、猶又御老中水野出羽守様え御駕籠御訴詔及再々度候付、右佐々木惣左衛門

御公儀様え御召出相成、御吟味之上入牢被仰付候趣、当御地行所一統右両村之依働、再檢地ハ勿論其外種々之危難も可有之処、御地頭所之御憐愍ヲ以無故障相治り候え共、御免願行違ひ付、両村之熊田村無何と気隔相成居候付、当御知行所万端為取締、今般青木丈右衛門殿御出役有之候処、是迄御知行所三ヶ村は不依何事一同有之候え共、右気隔付御出役より御取計等何角御用向不都合付、右御出役より御内意も有之、須衛村庄屋佐右衛門・古市場村庄屋源右衛門・同村年寄清助・伊吹村年寄善六・右四人之者立入取暖之趣意ハ、野口・嶋崎両村出府御訴詔申上候付、多分入用等之雜費も相立、依之熊田村より金五拾兩式ヶ村え差出し、内金五

兩ハ暖人ノ賈請、殘金四拾五兩相渡候筈、猶又双方意味合行
 違、氣隔之趣意ハ立入ノ賈受、然ル上ハ以来御用向ハ勿論、
 不依何事三ヶ村一同隔心無之筈、双方村方小前一同納得内濟
 仕候処相違無御座、為後年為取替濟口一札、仍て如件

〔二八二九〕
 文政十二年八月

- 熊田村庄屋 源兵衛
- 年寄 武藏
- 百姓代 磯七
- 小前惣代 利助
- 野口村庄屋 善兵衛
- 同 清右衛門
- 年寄 治吉
- 百姓代 萬右衛門
- 小前惣代 兼藏
- 嶋崎村庄屋 儀助
- 年寄 民藏
- 百姓代 佐助
- 小前惣代 彦作
- 取暖人 須衛村庄屋 佐右衛門
- 同断

右一件中国方目次并願書証文類其時々寫置候分有之候之共、
 余リ細筆ニ認メ有之、一見も相成兼、且は後年ニおよび板
 古ニも紛レ入候半事を惜ミ、当春二月下旬より兩村相談之上
 認メ替、一件中有体之実意相認候処、相違無之ニ付、為其兩
 村調印致置候、以上

- 古市嶋村庄屋 源右衛門
- 同断
- 同年寄 清助
- 同断
- 伊吹村年寄 善六
- 野口村出府人 九兵衛
- 同断 兼藏
- 組頭 直右衛門
- 同断 助藏
- 同断 友藏
- 同断 源之助
- 出府人同断 嘉右衛門
- 同断 友右衛門
- 同断 甚六

〔二八三〇〕
 天保二年五月

- 右村百姓代 萬右衛門
- 年寄 治吉
- 出府人庄屋 金左衛門
- 庄屋 清右衛門
- 嶋崎村小前惣代 甚七
- 同断 儀兵衛
- 同断 勇右衛門
- 出府人同断 彦作
- 組頭 林内
- 同断 和藏
- 同断 見代藏
- 出府人同断 五右衛門
- 右村百姓代 佐助
- 年寄 民藏
- 出府人庄屋 儀助

編集後記

逐次刊行計画に基づき、今回「各務原市資料調査報告書」第十一号として「文政十二 徳山分家領騒動記録(一)」を刊行しました。歴史は何と言っても、文書や記録によって解明されることが多く、今回の史料も郷土を愛し、郷土に生きたわたくし共の祖先が、厳しい封建制度のもとで、しかも農民より上る正租を財源としていた当時の組織の中で何を考え、何を願って必死の努力をしたのかを伺い知る貴重な史料であります。

この史料は、文政十二年(一八二九)に起きた騒動を、二年後の天保二年(一八三一)に後世への証としてまとめて記録したものであり、これを(一)とし書簡を(二)として刊行したいと思っております。

今回の騒動記録も全文を写真版にし、その判読文を載せるという構成にしました。郷土史研究の史料として、また古文書学習用のテキストとしても、多くの方々に幅広く利用していただけることを願っています。

最後に、本資料調査報告書第十一号の刊行に当たり、資料所蔵者の大掘幹夫氏の御理解と御協力をいただきましたことを深く感謝いたします。

平成二年三月十七日

各務原市歴史民俗資料館

館長 永井 八郎

各務原市資料調査報告書第十一号

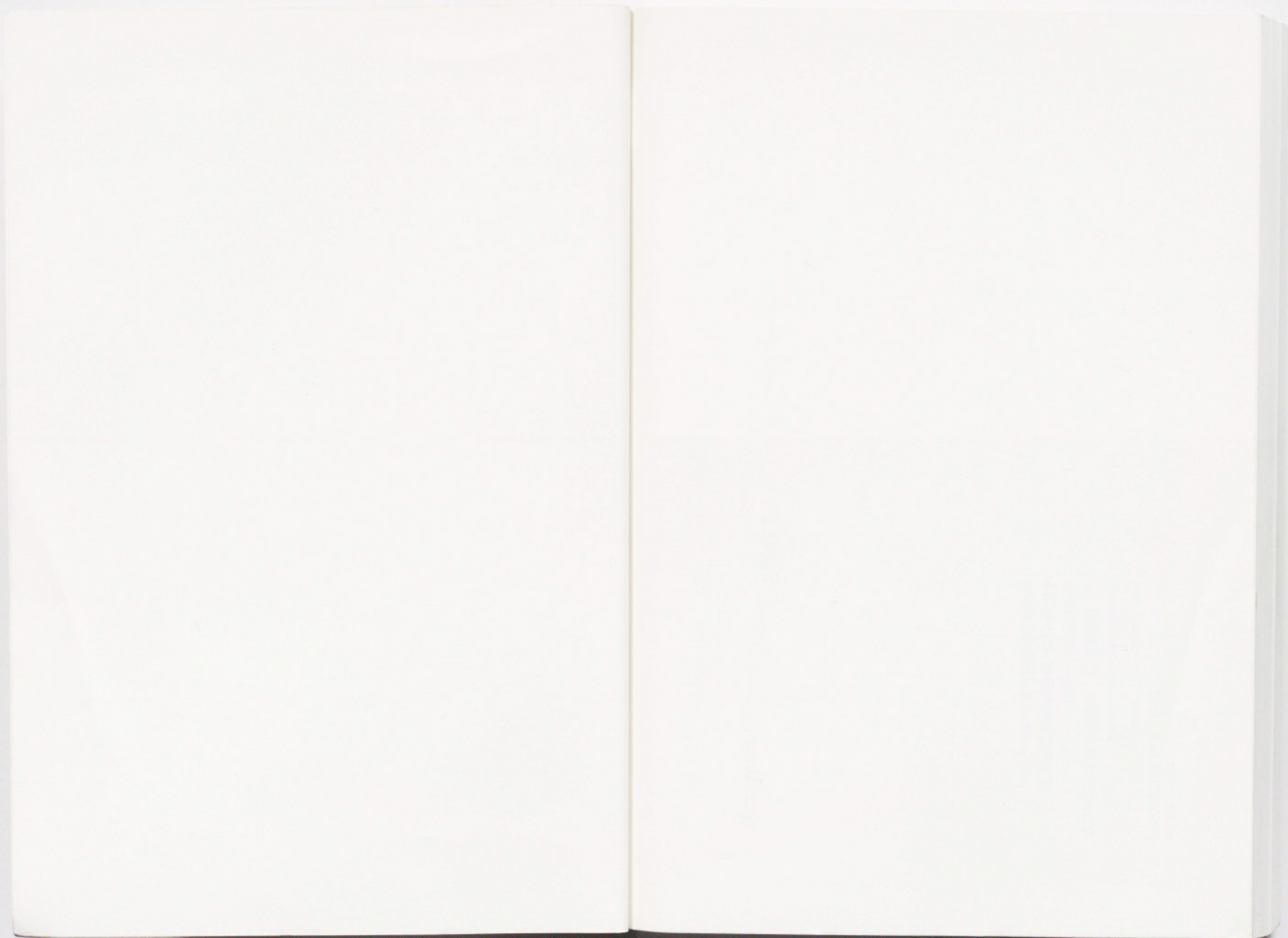
文政十二年 徳山分家領騒動記録 (一)

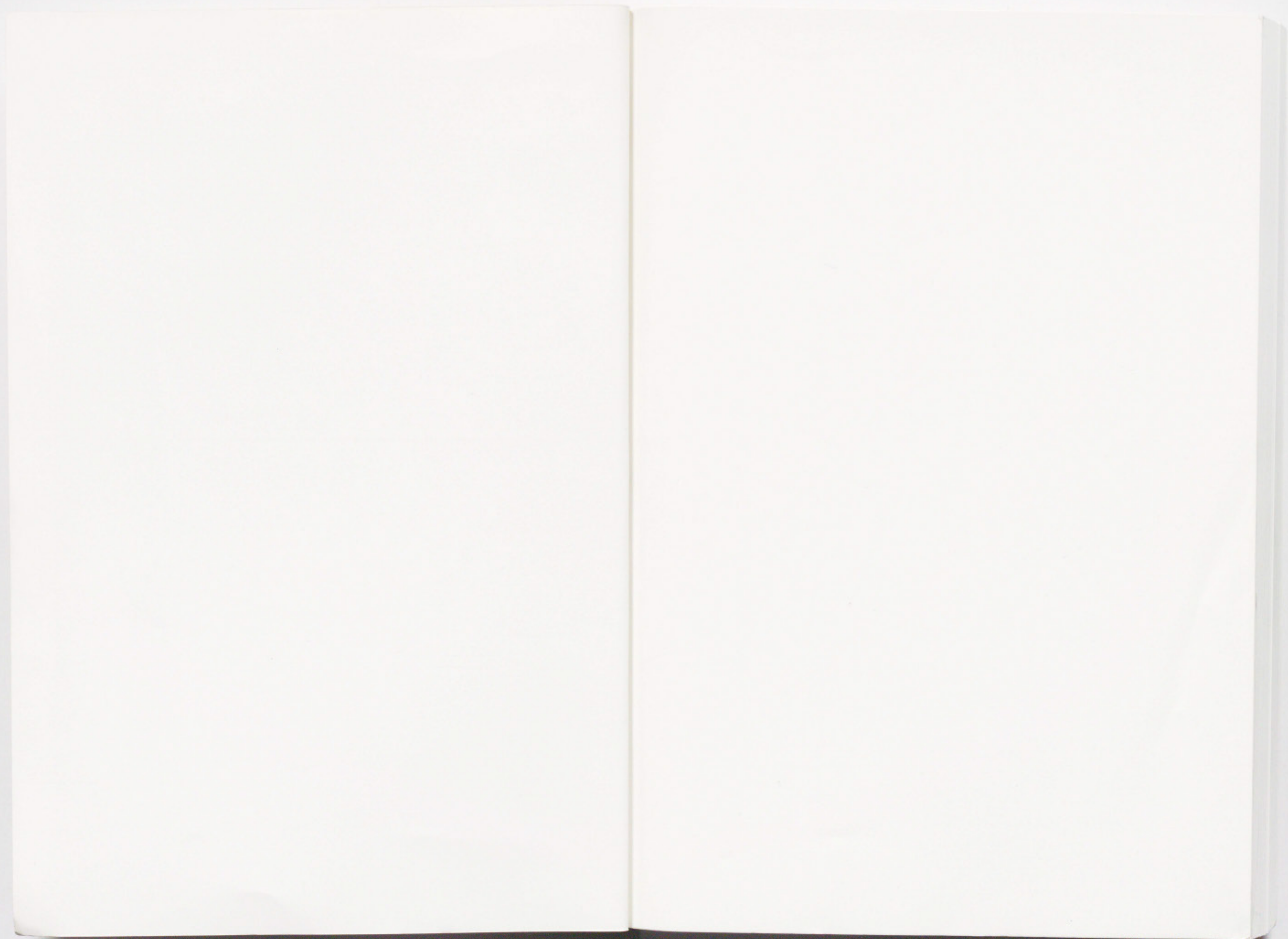
平成二年三月十七日

編集発刊(C) 各務原市歴史民俗資料館

各務原市那加桜町二丁目一八六番地
番(〇五八三)八三二二一(内)三三三二
振替 名古屋五七七三一 各務原市

印刷 西濃印刷株式会社
岐阜市七軒町一五





各務原市図書館
110207826